

---

# 英雄になろう

ホワイトナイト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄になろう

### 【Nコード】

N1320D

### 【作者名】

ホワイトナイト

### 【あらすじ】

「英雄はつくられる」そんな衝撃的事実を知った中学生、岩切は心の中で夢想していたファンタジーの世界へ放り込まれてしまう。彼は英雄となり、元の世界に帰れるのか？今賽は投げられて、運命の歯車は回り始める・・・

## プロローグ（前書き）

人生で最初の連載小説です。  
至らない点ご容赦ください。

## ブローグ

「超能力とかあったらな」と思ったことのある人は多いと思う。  
普通の人間にはない「才能」を欲するのはそう不自然なことではない。

だがそれがあまりに現実からかけ離れている事象、空を自由に飛べるとか不死身の肉体とかを夢想する人は「現実と向き合うだけの力が無い」と周囲からレッテルを貼られる。

しかし本当に力が無い人間だけだろうか？

現実世界で十分成功している人間にも、その現状に飽きている者は少なくないだろうし、その中の何人かが、現実的にありえないファンタジーな世界を望むのはある意味自然なことではないだろうか？

この命題を本気で考えた者の手により、物語の幕は開かれる。

## 第一話

まずい、マズイ、不味い、ma z u i・・・

文芸愛好会部員、俺こと岩切<sup>いわきり</sup> 勉は絶望的な状況に陥っていた。場所は文芸愛好会の部室。中央に長方形のテーブルがあり、周りには部員全員が座っている。

上座（と俺が勝手に呼んでいる）では部長が「人気が出る小説とは」というテーマで部員に書かせたレポートをパラパラ読んでいた。いたって普通の風景、しかし俺にとってこの状態はやばかった。とくに「部長がレポートをパラパラ読んでいた」の部分が。

（つたく、落書きとレポートを間違えて持つてくるなんて、どーかしてるぜ・・・）

別にそれだけならどうということはない。そう、ただ間違ただけなら「明日レポートを持ってきます」と断ってから提出しなければ済むことなのだが、俺はあることが落書きと勘違いした清書を学校に行く際ゴミ捨て場に捨ててしまったのだ。

しかも勘違いに気づいたのが部長がレポートを読み出してから、そしてその内容が致命的だった。

「・・・岩切君、君のレポートなんだが、なぜ二枚しかなく全て箇条書きで『18禁な官能小説が人気に決まってるだろーか』とか『部長の書く原稿用紙の無駄遣いとしか考えられない小説以外』などを書いてあるのだろうか？根拠が書いてないようだから聞かせてもらいたいんだが・・・」

「あーっと、特に無・・・」

「答えるって言うてんだよこの糞が！！レポートは客観的事実に基づいて書けて、何度いわせりや理解できんだオラッ！！貴様なんぞに鉛筆持つ資格ないこのパープリンのポンチ野郎！！」

部室がビリビリ振動するような怒号。まだ日の浅い新入部員は部長

の知的な風貌と想像を絶する罵詈雑言とのギャップで、ドン引きするか青くなっている。

「す……すみません……」

鬼怒川 龍一、15歳。剣道部と文芸愛好会を掛け持ちする優等生。きぬがわ

普段は誰に対しても物腰柔らかな態度で警戒心を与えない……そして、軽い二重人格。

その罵声は一般的に怖いとされる生活指導の教師を遥かに超越し、部長を務めている剣道部と文芸愛好会の部員からは「冷静に凶暴」と称されていた。

しかしその指摘はいちいち最もで、優等生タイプの後輩に慕われている。

ま、部長に論説文とか小論文書かせれば右に出る奴はいないけど、小説はどれも難解過ぎて不評だったから、俺のこの指摘だけはそんなに的外れなものでも無いだろう。

しーんと部室が静まり返るきっかけを作ったのが部長であれば、それを破ったのもまたこの人だった。

「……それはさておき、このレポートの二枚目、三行目であるが……」

般若っぽい顔が元の知的なそれに戻ったので、部員は全員安堵の表情を浮かべている。

それを知ってか知らずか、部長は続けた。

「この『美少女と少年（容姿は問わず）との純愛物語＋ファンタジーがいいんじゃない？』というのは全く同感だ。」

「……!？」

「書店を調査した限り、この純愛物語というのは実はなかなか需要が高い。またインターネット上の「ブログ小説」も圧倒的にこのジャンルが多い。そしてファンタジーというのも年齢問わず人気があ

る。事実私の調べた小説投稿サイトでも人気上位はこの分野のものが多かった。18禁の小説というものは読者層が限られてしまうために人気が出るといっても万人受けするものは当然、ない。我が文芸愛好会は需要に合った小説も書けなければならぬ。このレポートを次号の部誌のテーマの参考にする、ということは前に言ったと思う、そこで……」

部長は一旦言葉を切り、部員を見回した。

「『美少女が出てくるファンタジー小説』を、次回のテーマとしたと思う。全員、1ヶ月後の会合までに書いてきてくれ。今回の会合はこれで終わりだ。」

……これはひょっとしてギャグで言っているのか？

この部長は本気で部誌にファンタジーラブを載せようと言ってるのか……？

先ほどとはまた違った意味で引いていた部員は我に帰り、筆記用具を持って部室を出て行った。

「ちよつと、岩切君」

帰りがけに部長に声をかけられた俺はダッシュで逃げたかったが、無視すると後がもつと怖いので

「な、何ですか？」と声が震えないように気をつけて返答した。

「さつきはかつとなつてすまなかつたな」

「いえ、気にしてませんから大丈夫です。」

「そうか、それなら良かった。次号の君の小説、楽しみにしてるよ。」

「

「……は？」

「君、自分でレポートに書いたのだから、当然すごいものが書けるんだろうね？」

レポートのテーマは「万人受けする小説」だから別に自分が書けなくても何も問題ないのだが

蛇ににらまれた蛙状態だった俺にはそこまで考える余裕が無かった。

「はあ……まあ」

「私を失望させないでくれよ?」

分かる者には分かる、部長の絶対的脅迫。俺が嵌められた、と気づいた頃にはもう手遅れだった。



## 第二話

部長にプレッシャーという名の復讐を受けて、俺はその日非常に不機嫌だった。

放課後はまっすぐ家に帰らず、俺はいつもはサボる図書委員の仕事をなるべく図書室にいた。

どうして今日に限って図書委員の仕事をしなくなったのかは俺自身も分かっていなかったが。

「ま、いつも通りなんとなくなんだよね」

なんとなく、直感で。俺は14年間の人生においてこの方法で間違ったことが無かった。

早めに小説を書いておくか、と仕事が一段落してから俺は原稿用紙を取り出した。

・・・どれくらいの時間が経ったか、2・3本の鉛筆がおしゃべりになり、引き裂かれた原稿が机の上に散らばった以外、何も変わっていないかった。

「駄目だな、今日はもうむりってことで」

俺は奥の本棚のところに行き、「残酷歴史物語」というアレなタイトルの、しかもジャンルがノンフィクションの本を取り出そうとして・・・

見慣れない、黒いパンフレットを見つけた。

「・・・あん？なんじゃこりゃ？」

いくら仕事をさぼっているとはいえ、一応自分は図書委員である。

見たこと無い本なんて珍しい・・・というよりありえないはずだが・・・と思いつつ伸ばした手を方向転換。それを手に取り机に戻る。

「やべ、こんな時間かよ。」

俺は黒い冊子と原稿用紙をバックに入れ戸締りを済ませると、足早に下駄箱へと向かった。

帰り道、俺はずっと不可解な黒い冊子のことを考えていた。

帰宅後、俺はベツトに転がりながら、図書室から持ってきた黒い冊子を眺めていた。

「何だろね、これ・・・」

俺は気になったが、開くのをためらっていた。

直感が「面倒なことになる」と告げているのだ。

しかし今回ばかりは好奇心が打ち勝って、直感を拒否。

一気に、それを開いた。

「英雄に・・・なろう?」

そのページ目には黒をバックに「英雄になろう!」と大きく金色で書かれていた。

「代わり映えのしない日常から抜け出したい、ファンタジーに生きてみたい、私の才能はこの世界に留まらない、そんなあなたに勧めたい『英雄ツアー』!あなたの才能を生かして異世界でミッションをクリアし、あなたも英雄になろう!・・・か」

くだらない、くだらないが、これは小説のネタに使えるな。このツアーに参加した主人公が、自分の才能を開花させていく。これはいける!

俺は原稿用紙をバックから出そうと冊子を机に置こうとするが・・・

「む・・・これは・・・!」

まるで瞬間接着剤で固められたように、冊子から手を離すことができなかった。

そして、俺の腕は自分の意思に反して次のページをめくった。

次のページには何も書かれていなかった。ただ黒いページが俺の方  
に向いているだけである。

俺の腕はそのまま誰かに操られているようにその黒いページに触れ  
た。

「っ・・・！」

声にならない悲鳴、俺は腕から一瞬にしてその冊子に飲み込まれた。  
意識を失う直前、俺は「やっぱり、開けなかった方が良かったな」  
と直感に従わなかったことを反省していた。

### 第三話

「・・・さて、意識を取り戻したわけだが・・・」

俺は目を閉じたまま心の中でつぶやいた。

取り敢えず、目が覚めたと誰かに気づかれる前に、自分の置かれて  
いる状況を整理してみよう。

床の冷たい感触・・・これはタイルかな。匂いは無し。僅かに聞こえるのは衣擦れっぽい音・・・誰かが近くにいます。タイル張りとなるとここはトイレかな？いやそれならアンモニア臭が・・・

「あんた起きてんだろ？」

不意に浴びせられる言葉。

俺はそれに対し「声はおそらく前方5メートルの位置で発せられているな」と推理を深めただけだった。

「・・・まだ寝てるんかな？」

その言葉が合図。

両手に力をこめて体を跳ね上げ、一気に立ち上がる。声を発した人物の位置を確認し間合いをつめて拳を振りぬく。

・・・それらの行動を僅か1秒弱で行った。

「起きてるんだろ」という問いかけを無視することにより、自分の考えが間違っていたのかと敵に思わせ、その一瞬の隙について攻撃する！・・・というのが俺の作戦。

「やれやれ・・・血気盛んなことだね」

俺の考え付く限り最強の一撃を、しかしそいつは掌でやすやすと受け止めた。

「私があんたに危害を加えない。だからあんたも私に殴りかからない、理解したか？」

・・・。

取り敢えず第一撃が避けられたことにより、俺の勝つ望みは絶たれたわけだ。そう考えて拳を降ろした。

その人物は黒いワイシャツに赤いネクタイ、白いスーツを着てサングラスを掛けていた。

そして、金髪美女だった。

・・・何だ？俺は暴力団の事務所にでも監禁されてるのか？

謎の人物の服装を認識した後、俺は周囲を見回した。

床と壁は黒と白のタイル張りで、部屋の大きさは体育館ぐらいと広く、

中央に仕事机っぽいものがぽつんと置かれていた。

また壁には大量のドアがところ狭しと並んでいた。

「さて、単刀直入に言おう。君は『英雄ツアー』に選ばれた。

今から君には君にとってのファンタジーの世界『レバーレンス』に行ってもらい、

5つの大国に潜む魔物を退治し、その証拠として彼らの得物を持ってきてもらいたい。

何か質問は？」

いやいやいや、もうなんかどっから突っ込んでいいかわかんないよ。・・・ここで「意味わかんないんだけど」というのは簡単だが、きつと相手はそういうことを予想してるだろうな」

「・・・そうだな、まず君は何者だ？」

「人に・・・」

「『人に名を聞く前に自分が名乗れ』とかありきたりなセリフ言うのなら名乗るが、

俺は岩切 勉。14歳だ。理解したか？」

美女はあきらかにうざそうな顔をしながら

「私はレリウーリア。異能を持つ者を異世界に送って英雄となってもらう、

君の世界で言うところの・・・あゝ、つあーこんだくたあ？というやつだ。」

ツアーコンダクターってちょっと違う気がするが・・・

「なぜそんなことをしている？」

「お前神様って信じるか？」

質問に質問で答えるな、と思ったがそれを言ったところで話は進まないだろう。

「俺は無神論者だ。」

「ふーん・・・まあ神様ってのはいるわけで、ありとあらゆる世界の住人を作る創世主なわけだよ簡単に言ってしまうえば。その住人の能力とかはそのとき決定されるんだよね。」

「馬鹿馬鹿しいね。人間は努力しただいでどうにでもなるもんさ」

「それは単に努力できる才能があっただけ・・・そうね、『ブスを美人という人はいても、美人をブスという人はいない』って言えば分かるかしら。」

・・・それは、確かにそうかもしれない。

「ただ神でも住人の運命に干渉することはできないわ。ただただ創るだけ。」

ということは例えば住人の誰かが凶悪殺人鬼になって周りを殺しまくっても神様は止められないわけだよ。」

そりゃ困りますね。

「と、いうわけで、この『英雄ツアー』で英雄伝説を作ってその世界の住人の信仰の対象にするんだよ。それによってその世界の人間の行動をある程度制御出来るんだ。」

君の世界では・・・そうだな、『イエス』って知ってるか？」

ロックグループ？違うよね。

英雄で「イエス」っていうと・・・

「イエス・キリスト!？」

「そう呼ばれているみたいだな。あの男はもともと魔法使いの世界にいたんだ。」

旅の途中で様々な奇跡を起こして見せた、って伝えられてるだろ？そうやって課題をクリアした後元の世界に帰っていったんだ。」

「磔刑になったんじゃないのか？」

「磔刑になったのはあいつが作り出した魔法で動く人形だよ。

その後さも復活したように本物が出てったのさ。んで宗教が出来て、それ信じる奴は己の『信条』に従って殺人とか盗みとかしなくなった。

な？こうやればまとまるだろ？」

「無論英雄ってのは聖職者だけじゃないぞ、劉備とかシーザーとか・・・」

三国志にローマ皇帝ですか。

なんだかともないことになってるような気が・・・

「さて、質問はこれまでだ。命の保障は出来ないが、何年掛かろうとクリアすれば元の世界の同じ時間に返してやるから」

・・・ある程度覚悟してたがシヨックだな。

何年も掛かったり、死んだりする可能性があるんですか。

「お前の真後ろのドアから行けるから、行ってらっしゃい。」

ここから逃げられない以上、行くしかないか・・・

俺がドアノブに手を掛けたとき、

「あ、言い忘れてた、君には拒否権がある。もし行きたくないんだつたら元の世界に返して

あげるよ。もちろん今までのやり取りの記憶は消させてもらうが。」

・・・一番重要なこと忘れてたねこの人。

俺が出てっていった後だったらどうするつもりだったんだろね。

「どうする？行くか行かないか。」

俺は行かない、と喉まで出かったが、ふと文芸愛好会のことや頭に浮かんだ。

・・・元の時間に帰ってこれるなら、その体験を基にして小説書けるよな。それに今

帰れるっていうのがでなんだっていうんだ？つまらない日常を繰り返すことができるってだけじゃあないか。これこそ「俺の望んでいたこと」なんじゃあないのか？少なくとも刺激の無い腐った安寧の

日々を送ることを盲目的に求める人間じゃあ無かったよな俺は。死んだところで心残りなんて別に無いし、こんな千載一遇のチャンス俺は逃すのか？

「・・・行かせてもらおう！」

「よし、いいだろう。」

そういうと女は突然俺の胸に手を当てた。

「・・・？」

「動くなよ」

その後展開された光景を見ながら「動かないでいる」というのはなかなか難しかった。

なにしろ胸から刀っぱいものかによきによき生えだしたからだ。

「・・・っ!？」

それは俺の胸から引き抜かれ、女の手には収まった。

「はいこれ、英雄の証。お前の精神を具現化した刀。ちょっと念じるだけで出したり消したりできるから。」

なんとまあ。これが俺の武器ですか。

その刀・・・と言っているのだろうか、それは目の粗い両刃鋸をそのまま巨大化させたような異様な形状をしていた。

・・・なんか、主人公が初めに貰う武器っていうより、ラスボスが持つてそうな得物だよな・・・

「これが俺の精神かい。もっとスマートだと思ってたがな。」

「さあ？どうだろうな。さて、これで本当にお終いだ。」

女は微笑んでいるようでそれでもない微妙な表情で「行つてらっしゃい」と言った。

・・・行きますか。

俺は決心が鈍らないうちに、一気にドアを開け、記念すべき一步を踏み出した。



## 第四話

さて、今俺は異世界にいるわけだが・・・

俺の記念すべきスタート地点は、森の中だった。

マイナスイオンたっぷりの空間に、俺は和んだ。

ふと振り返ると、ドアはもう消滅していた。

空を見上げながら、俺は思った。

これからどうしよう・・・

いつも通り直感に従って行動してもいいがここは異世界。

とりあえず一歩間違えば死ぬと考えて差し支えないだろう。

となると少しは考えたほうがいいか。

まず・・・なるべく正確な地図。後は金。

装備は・・・

そこまで考えがいたって、俺は初めて自分の服装を見直した。

学校帰りの制服のままだった。

・・・まあこれも結構動きやすいし、なんだかんだで軍服にちよつと似てるこの服好きだし、

いいか。

武器はこの刀で十分だろう。持ってみて分かったがこの刀、かなり長くて重い。

普通、精神の具現化うんぬんの武器って「意外と軽い」のがセオリーだと思ったが・・・

まあ、これだけ重さがあれば当てるだけで切れちゃうだろう。

一応剣道初段持つてるし、扱えるかな。

考えがある程度まとまった俺は、ぶらぶら森の獣道を歩き出した。

・・・2時間ぐらい経ったかもしれない。いや、もったかも。

帰宅したら玄関に腕時計を置くという普段の習慣をこれほど憎んだことは無かった。

「もし今時計はめてたら、今何時かぐらいは分かったのによおおおお！」

つまるところ、俺は道に迷っていた。

こうして えいゆうは たびだっていった・・・「完」

なーんて、洒落になんねえ・・・この状況、水も食料も無い。どうしようもない。

途方にくれた俺は傍の朽木に腰掛けた。

なんか足のたくさんある虫が側を這い回っていたがそれすらも気にならなかった。

自暴自棄になった俺は、いつの間にかここに浮かんだことを言葉に出していた。

「そうさ・・・俺には普通気づかないような『異能』がある。それに気づいたのは最近だったけどな・・・ここで俺を死なせたら、損すんぜ・・・」

俺は息を大きく吸い、いるのかどうかも分からない存在に向かってつぶやいた。

「神サンよお」

・・・俺が言い終わった直後だった。  
「たあゝすけてえゝくださあああゐ」

お？

おおお？

英雄の出番か！？

よっしゃ、いっちゃってやるぜ！

・・・なんてことはそのとき全然考えて無かった。ただ人が近くにいるということに

安心してそちらの方にダッシュしただけだった。

声を上げた人間は案外近くにいた。

そこには中世に出てくる兵隊のような格好をした男が3人いて、1人を取り囲んでいた。

その人物がこれまた・・・

「か、かわええな・・・」

美少女だった。

こげ茶色のロングヘア、それに覆われたぬけるように白い顔、大きくちよつと潤んだ目、

そして水色のワンピース。

文句のつけようが無いくらい完璧だった。

その姿にしばし見とれたあと、素早く脳を回転させた。

・・・とりあえず今の出来事で分かったことは「言葉が通じる」ということ。

言語から学ばなくちゃならなかったらどうしよう、

と本気で心配してたので、これは大きかった。

あと男達の格好からどうやら中世ちっくなファンタジーの世界だ、ということ。

敵が銃持ってバンバン撃ってきたらどうしよう、とこれまた心配してたので、これも解消。

と、そんなことを考えてたら男達が俺に気づいた。

「ん？なんだい君は？」

リーダー格の男がしゃべりかけてきた。

「いえ・・・別に、通りかかったただけですが、悲鳴が聞こえたような気がしまして・・・」

「おや？私達には聞こえなかったよ。ここは鳥が特別多く生息する地域だし、聞き間違えじゃないかな？」

「・・・え、まじっすか？」

そうなると俺は穴にもぐって窒息死しなくちゃいけないほど恥ずかしい思いをしたことになりますけど・・・

と、そうこうしているうちに美少女が助け舟を出してくれた。

「ち・・・違います。私が歩いてたらこの人たちが取り囲んで・・・その・・・」

く、口に出すのも恥ずかしいようなことをさせようと・・・」

「っ、馬鹿、言うなっ」

おっとお？

今の呟きは少女の言った事の肯定の返事として受け取っていいのかな？

「そいつは見間違えませんね。別に女なんていくらでもいるわけですし、ここは素直に

退いたほうがいいんじゃないですか？口・リ・コ・ンさんよあ」

「んだと・・・！てめえもういつペン言ってみろ！」

「どこの誰だか知らないが、答える義務は無いよな」

その言葉にキレたリーダー格は腰の剣を抜くと俺の頭を切りつけようとした。

俺は手の中にあの鋸に似てる刀を出現させそれを受け止めると、ふとした悪戯心からこう言ってみた。

「今俺が刀抜いたのが見えたか？これが俺とお前達との差だ。死にたくなけりゃとっとと

失せな！！」

俺がっこいいゝ、とちよっと思った。

案の定、本気で俺が刀を「抜いた」のだと勘違いした男達は真っ青になりながら互いに目配せしあつて、ぱっと身を翻して森の闇に消

えていった。

闘えなかったのは残念だったが、なんだかんだ大人3人相手はきつ  
いだろうし、これでよしとしよう。と考えてると・・・

「あ、あの・・・」

と例の美少女が話しかけてきた。

顔がにやけないように注意を払って俺は答えた。

「なんででしょうか？お嬢さん？」

「旅の方・・・ですか？もしそうなら・・・助けていただいたお礼  
をしたいので・・・

家に来ていただけませんか？」

よろこんでえ！！と言いたかったが・・・

「お気持ちはありがたいですが、私はただの通りすがりです。お邪  
魔したら家族の方に迷惑をお掛けしますよ。」

「いえ、両親とは今別れて暮らしてるので大丈夫です。」

危ねーなおい。

「そうですか・・・それならお言葉に甘えて・・・」

地図と食料はこれで解決かな〜とか思いつつ、俺は美少女の案内で  
森の奥へと入っていった。

## 第五話

歩き始めて10分、美少女の家は森の中でも開けた場所にあった。

「ここが私の家です。」

その指の先、がっしりした感じのログハウスが建っていた。

あゝこれなら確かに泥棒とか不審者とか入ってこないだろうな。

「どうぞお入りください。」

「お邪魔します。」

家に入った俺はまず自分の目が正常に機能しているか疑った。

年頃の女の子の家ということでファンシーなものを考えていた俺は、目の前に置かれている

熊の剥製に目を奪われた。

「こ・・・これって・・・」

「あ、剥製なんで大丈夫ですよ」

いやそんなことは分かっていますよ。

容姿と家の玄関のギャップに驚きつつ、俺は家のリビングへと案内された。

リビングがこれまたすごい。一言で言うなら「獵師の家」だ。壁には弓やら斧やら掛けられ、

俺の頭上には何かの肉っぱいものが紐で下げられている。小物の類は一切置いてない。

今少女がお茶を淹れているキッチンはこちらから見えない。が見てみようとも思わなかった。

俺がいろいろな感想を抱いていると少女がお茶を運んできた。

「お待たせしました。」

「どうもありがとうございます」

俺の前に置かれるカップ。荒削りな木製だ。

味は・・・まあ普通、かな。

「これからどちらへ行かれるんですか？」

少女の問いに、俺は茶を吹きそうになった。

「・・・まずい、俺はこの世界のことを「ほとんど何一つ」知らない。旅人なのにご行くか知らない、なんて答えたらイカれてると思われるだろう。」

やべえ、相手が首かしげて不思議そうにしてるぞ、どうする俺・・・

「・・・特に目的地があるわけではありません。色々な場所に行つて見識を深めるといふか、

自分探しの旅、見たいなものですかね。」

我ながらうまくもない誤魔化しだな。

「そうですか・・・」

どこ出身ですか？なんて聞かれる前に俺は急いで話題を変えた。

「そうだ、もし良ければ水と食料を少しばかり分けていただけませんか？丁度尽きてしまったもので・・・」

「え？ええ、いいですよ。」

少女がキツチンの方へ向かうのを見つつ、後地図を見せてもらったから早いとこ切り上げよう、と考えていた。

しばらくすると少女が戻ってきた。不思議なことに包みを二つ持っている。

「あの・・・」

「何でしょうか？」

「さっき私、両親と離れて暮らしている、って言いましたよね、あれ嘘だったんです。」

もう両親はこの世にいません。2年前に死んでからずっと一人暮らしなんです。」

・・・何が言いたい？

「そうだったんですか・・・」

「私、内気な性格なんで、森の外に出たことないんですよね。」

水や食料は全部森で手に入りますし・・・でもあなたのお話を聞いて、

このままじゃ駄目だっと思ってたんです。町がどういうところか知りたいですし、

怖がってばかりじゃ何もできないって……」

まさか……？

「あなたの旅に、ご一緒させていただきませんか？」

きた〜この展開。

さて、どうしたもんだらう？

普通に考えれば、ここは断るべきだ。俺の旅の目的は魔物をじゃんじゃんぶつ殺して武器を

奪ってくることだ。お世辞にも安全とは言いがたい。

しかし……ここで熟慮しなければならぬ二つの要因があった。

一つは地図のこと。ここで断って地図だけ見せてもらう、というわけにもいかないだろう。

もう一つのこと。さっき俺はお茶を待つてる時に本棚が視界に入り、こっそりと一冊抜いて

読んだ、いや読もうとした。

わけわからん文字で書かれてさえないなければ。

どーして言葉は通じるのに読めるようにしてくれないんだよ……

この先、どうしても文字を読み書きしなければならない状況に出会うだろう。

この少女は2年前まで両親と暮らしていたのなら、おそらく両方ともできる。

こんなチャンスこの先来ないかもしれない。さてどうするか……

「是非と一緒に、と言いたい所ですが、私はあなたをお守りできるほど強くありません。

残念ですが……」

俺は断ることにした。読み書きなんて町に行けば誰かに頼めるだろう。



しかし少女の返答は俺の想像を遙かに上回った。

「それなら大丈夫です！自分の身は自分で守れます。」

しょんぼりするかと思いきや顔に満面の笑みを浮かべてこれだもんな。

少女は壁に掛けられている武器の中からこついクロスボウ（洋弓銃）を取った。

「斧とか剣はうまく扱えませんが・・・これなら自信があります。玄関に熊の剥製がありましたよね？あれも私が仕留めたんですよ。」

え？  
あれご両親の形見じゃなかったんですか？

普通に俺より戦闘能力高いんじゃないんですかひょっとして。

「どうか一緒にさせてください」

やれやれ。これで俺が断る理由が無くなっちまったな。

「分かりました。いつ終わるとも知れない旅ですがこれからよろしく。」

「ええ。よろしく願います。」

「・・・そういえばまだ名乗っていませんでしたね。イワキリ、と申します。」

「ベルフェゴールです。ベルフェ、と読んでください。」

少女 ベルフェゴールは微笑んだ。

その顔を見た俺は、ああ、これだけでこの異世界にきた価値あったなと密かに思ったりした。

## 第六話

ベルフェゴールの案内で3時間程歩きようやく森をぬける事が出来た。

森をぬけたところは大草原といった感じの平地で、そよ風に草がなびいていた。

地平線付近に街の門らしきものが見える。

俺は森の中で隣の相棒に教えてもらったことを思い返す。

まずこの世界には五つの大陸があり、それぞれアンドラス、セラテイエル、ニスロク、

マシュイト、タグリヌスという王家が納めているらしい。一応国交があり大陸間の移動は

そう難しくなく、この五つの大陸全体をまとめて「レバーレンス」と呼んでるということだ。

そう聞くと捻くれてる俺は「じゃあ海を越えた向こう側には何があるのかな」とか思ったり

するが、彼女の話によるとこの世界ではあまり航海技術が発達しておらず、せいぜい近い大陸

間の移動ぐらいしかできないそうだ。まあ俺をこの世界に放り込んだ女の言葉を信用すれば、

（信用したく無いのだが）この五つの大陸を巡ればいいわけだから、あんまり関係ないだろう。

ずーっと海を渡ってけば日本についたりして、なんてくだらないことを考えてると、

「イワキリさん。」と緊張した声が聞こえた。なんじゃ？と思うまでもなく俺の視界には現実と

認識したくないような映像が映った。

なんと形容したら良いか、牛の頭に腕が四本ある人間の胴体がかうつについて、背中に

たてがみがある生き物と言えばよいのだろうか。そんなのがいた。しかも二匹ほど。

これは・・・ファンタジーでお約束の魔物ってやつかね。

「どうします？イワキさん」

「俺は良く知らないんだけど・・・こいつらって強いのかな。」

と思わずいつもの口調で返してしまう。しまった、思ったがベルフェゴールは特に気にして

ないようだ。

「私は魔物を狩ったことは無いので分かりませんが・・・」

つてベルフェゴールが言うつてことは魔物なんだな。

普通出くわしたら、俺なら逃げる、が・・・

あの女は「魔物を倒せ」と言った。と言うことはこいつがその中の2匹かもしれない。

「俺が倒すから、ベルフェは・・・」

「もちろん戦いますよ。」

有無を言わず、と言った感じた。

やるか。

やりましょう。

そう言った俺達は横に跳び、魔物の頭上からの一撃を避けた。

さて、殺し合いを始めますか。

不思議と恐怖は無い、緊張はしているがそれが良い方向に働いているのを全身で感じる。

俺は刀を出すと、正眼に構えた。

やつと名前を呼んでもらえた。

彼が「やるか」と言ってくれたとき、私は嬉しさがこみ上げてくるのを感じた。

信頼されている。

それは両親が死んでから一人で過ごしてきた私にとって、砂に水が染み込むように心が潤う出来事だった。

高揚感に身を任せつつ私は一気に化け物と距離を取り、クロスボウを出し矢をつがえる。

距離は大体 10 m。

どうやらこの生き物、見た目ほど頭が悪くないようで、私のクロスボウに警戒してか距離をつめてこない。

一発外した隙を突くつもりかしら。

迷わず私は胴体に撃つ。

予想通り魔物は矢をかわすと、私に襲い掛かってきた。  
残り7m。

私はクロスボウを捨てると、腰に差していた狩猟用ナイフを投げつける。

「私の武器はクロスボウだけじゃないわ」

魔物は距離が近かったためか、今度は腕で払い落とした。

残り  
4  
m。

魔物の勝ち誇った顔が視界に入る。

私は思わず笑ってしまふ。

ああこの魔物、頭はまあまあみたいだけど完全に経験不足ね。

魔物は振り上げた腕を私の頭に……振り下ろさなかった。

「グ・オオオオオオ？！」

雄たけびを上げつつ胸をかきむしり、地面をのた打ち回る。がそれ  
も程なくして止まる。

僅かな切り傷で死に至らしめる激毒。

それが私の真の武器。

結局見かけ倒しだったわね、この生き物。私は矢とナイフを取りに行った。

「オラアッ！」

「フゴオオ！」

ぶつかり合う刀と拳。

やはり化け物は一味違う。いつもあくび交じりに剣道部の奴らと相手している俺も今は久しぶりに本気を出している。

魔物の腕は後3本。1本は初太刀で切った、というか切れてしまった。

この刀、まるでバターを切るみたいに丸太みたいな腕を切っちゃうからね。

俺もこの化け物も一瞬呆気にとられちゃったよ。

腕は残り3本だが、相手も俺を強敵と認識したらしい。刀の刃の部分に触れないように内側から俺の斬撃を弾いている。

しばらくは一進一退だったが、徐々に体力の差によって俺のスピードが鈍ってきている。

・・・そろそろ決めないとな。

俺は拳のラッシュを避けつつ、じりじりと距離を取る。

拳の射程から外れたため、魔物は拳を止めると一歩近寄った。

・・・それが死への一歩だぜ、化け物ちゃんよ。

俺は刀を地面に突き刺すと、そのまま跳ね上げるようにして土くれを相手の顔に浴びせる。

「ムゴオ！」

不意を突かれた魔物は顔に掛かった土のために目をつぶってしまう。間髪入れず、俺は胴を深々と切り裂いた。

静寂。

魔物は断末魔の悲鳴すら上げずに倒れた。既に絶命している。

辺りを魔物の血が染める・・・かと思いきや、血は一切流れず、切り口から煙のようなものが

上がり、やがて全身が灰になって消滅してしまった。

魔物の最期を見届けると、俺は周囲を見回す。

どうやらベルフェゴールは既に敵を片付けて矢を取りに行っているようだ。もう1体の魔物の死骸も灰になっていた。

取り敢えず身の安全が確保されたことを知った俺は、その場にへたり込んだ。

あゝ疲れた。

ベルフェゴールの家を出たのが昼頃、今はもう夕方になってしまっている。

早いとこ街入って寝たいな。

と布団の寝心地について妄想していると、

「イワキリさん、やりましたね！」と嬉しそうな相棒の声が聞こえてくる。

「ああ・・・ベルフェ、お前ってやっぱり強いんだな。」

「フフ・・・イワキリさんだって。」

輝くような笑顔に、俺の疲れもちよっと癒える。

つかの間の休息。俺とベルフェはともに、程なくして街へと急ぐつもりであった。

しかしその甘い考えは、突然の闖入者によって打ち碎かれる。

「おーやっぱり強いねー二人ともー」

俺らは振り返った。

そこには夕日をバックに、赤と白の縞々のスーツというこれまたぶっ飛んだ服装の男がいた。

顔は美形だが、逆光のためなのだろうか、非人間的な妖気を漂わせているように見えた。

「今のは僕の部下だよ。力試しも兼ねてかなり強いので適当にあしらわせるつもりだったんだけど、まさか倒しちゃうとはね。」  
「なんだと？」

「君達はイワキリ君にベルフェゴールさんだね。初めまして、エウリノームといます。以後

お見知りおきを。」

「誰・・・あなた？それに部下って・・・」

「まあ簡単に言ってしまうえば、ここら辺一帯の魔物の親玉かな。」

その言葉に、俺は疲れた体に鞭打って切りかかる。

が、その刀は素手で受け止められてしまった。

「駄目駄目、今の力じゃ僕は倒せないよ。取り敢えず街でゆっくり休みな。これから君達は新しい仲間にも出会っだろうしさ。」

「な・・・なんでそんなこと・・・」

「ん？『何でそんなこと分かるのか』っていうのと『何でそんなことわざわざ言うのか』っていうののどっちを聞いたのかな？まあどっちも答えてあげるよ。最初の質問、それはそうなる運命だから。」

「なめやがって・・・」

「いや、真面目な話。僕に分かって君には分からない。それだけさ。あと2つ目、僕は自分と釣り合わない相手とは戦わないことにしている。つまらないし、死に行く相手の『これじゃ死んでも仕方ない』っていう諦めの表情見るのがそれこそ死ぬほど嫌なのさ。最後の最後まであがくことを忘れて死に逃げる、そんな奴らの始末は手先にもやらせりゃいい。僕が相手するのは君達みたいな精神的にも肉体的にも強い相手だけ。名誉なことだと思うよこれは。だから、君達には万全の体制で臨んでほしい。そしたら・・・」

突然、その微笑がまるで口裂け女のそのようにキューっとつり上がった。

楽しくて楽しくて仕方が無い、といった子供じみた、しかし人間らしくない笑顔。

隣のベルフェゴールを見ると、さっきまでの冷静な態度が嘘のように、震えていた。

おそらく俺と同じ・・・あの笑顔に恐怖しているのだろう。

「殺してあげるよ・・・ウフフフフ。」

俺とベルフェゴールが我にかえたのは、男が消え、今にも沈もうとしている夕日が目を刺してからだった。

## 第六話（後書き）

この物語始まって初の戦闘シーンでした。  
今後戦いの緊迫感等、うまく伝えられるよう精進していきます。



## 第七話

街の門をくぐるまでの道中、ベルフェゴールはずっと不機嫌だった。「どうして、そんな大切なこと言ってくれなかったんですか!」最初に俺は「どこに行くのか」と言う問いに「無目的だから決まってる」と答えてしまった。そう、魔物討伐という目的があるのに、関わらず、だ。

こんな怒るんだったら打ち明けなかった方が良かったかな、とちよっと思ってしまう。

「悪い・・・どこに魔物がいるかなんて分からなかったから・・・」  
「それじゃ嘘ついたことの説明になってませんよ。」  
・・・確かに。

しかし口をすべらせたがとき失言、これ以上説明の仕様が無い。ふと、ベルフェゴールの表情がそれまでのムスツとした物から、今にも泣き出しそうな顔に変わった。

「私が・・・信用できなかったんですか? もともと最初から打ち明ける気なんか無かったけどあのエウリノームっていう魔物が現れたから仕方なく話した。ってことなんですか?」

「違う・・・違うけど、確かにそう疑われても仕方がない。ベルフェ・・・こんな危険な旅に付き合わせようとして、悪かった。街に着いたら別れよう。」

「・・・そうさせてもらいます。」

空は今にも沈みそうな夕日と夜の紺青色とが混ざりあっている。

その光景は、溝がある俺とベルフェとの関係と対照的だ。

俺は空を羨んだ。

街についてからのことは、あまり良く覚えていない。気がついたと

きには俺は宿の三階の一室の窓からぼんやりと月を眺めていた。

これで・・・良かったのかもしれない。

もしこの旅を続けていたら、ベルフェが死んでいた可能性だってある。

俺はあの太陽みたいな笑顔を思い浮かべた。

どちらにせよ、俺は目的を達成すれば元の世界に帰らなくちゃいけないんだ。別れることになっていた。それが早まっただけのことさ。感情の部分ではまったく納得できていない。ベルフェと旅を続けた。しかしそれではお互いのためにならないだろう。と理性がそれを押さえつける。

・・・もう寝るか。

俺はベットに入り、明かりを消した。

なんであんなに怒ってしまったんだろう。

私は宿でクロスボウの手入れをしながら、罪悪感で胸がつぶれそうだった。

大切なことを、タイミングを見失って言いそびれることだってある。それがどうしてあの時分からなかったのか。

あんな風に別れてしまつては、彼は私が怖気づいたと思うだろう。

そんなことは無い。危険な旅でも、彼と一緒にならきつと怖くない。でも、もう手遅れ。

結局、長い間話していない「他人」に甘えたかっただけなのかもしれない。

私は大きいため息をつく、片づけを始めた。

・・・風が吹いている。

私ははっと、目を覚ました。いつの間にかベッドに突っ伏して寝てしまっていたらしい。

しかし室内なのに風が吹いていると言つのは・・・？

「あ、起きちまったようですね。」

「かんけーねーだろ、早いとこ仕事するぞ。」

私は後ろの壁の窓を見上げた。

窓枠に2人の男が立っていた。

「お嬢ちゃん、怖いことしねえから、ちよつと一緒に来てくれないか。」

背の高いほうが私に言った。

「もし、断ったら？」

「こうする。」

男は右手の指を複雑に動かす。私も思わず目がいつてしまう。そのまま・・・私の意識は深い闇へと沈んでいった。

「後はこの娘連れて帰還すりゃいいんですよね？」

「そうだ。俺はまだやることがあるから先に帰っていてくれ。しっ

かし、ベラドンナ様は何を考えていらっしゃるのやら・・・。」

2人の男はそのまま闇に溶け込むようにその場を去る。

この様子を見ていたのは、空に上がっていた月だけ。

しかしその月もやがて雲に覆われ、見えなくなってしまった。

## 第八話

朝起きてから俺は街をぶらぶらしていた。

宿屋の主人に聞いたところによると、ここの街は「エイム」といつて昔から魔法使いが魔術を学ぶために様々な地域からやってくることで有名な都市らしい。高名な魔法使いを自負するものなら一度はここに来たことがある、というから驚きだ。

因みに五つの王国でそれぞれ主要な職業が決まっていて、アンドラスは戦士、セラティエルは魔導師（エイムもこの大陸にあるらしい）ニスロクは冒険者、マシュイトは狩人、タグリヌスは盗賊ということだそうだ。

盗賊が人気な職業というのも変な話だが、宿の親父はこの国だけは王家の力が弱く、「ブルー・ワイルドエンジェル」という盗賊団が事実上国を支配しているため、と言っていた。

これからどうしよう。

朝起きたばかりだからか、あまり働かない頭を回転させる。

・・・そうだ、まず金を手にいれて宿代払わなきゃならんな。

方法はもう考えていた。五つの国は全て魔物に頭を悩ませている、という話だから「魔物退治」の名目で王家にスポンサーになつてもらえばいい。そうすれば魔物殺しもスムーズにいつて一石二鳥だ。

俺は王城（幸いなことにエイムのすぐ近くにある）への道を急いだ。

定期的に体に伝わる振動。

私は目を覚ました。

一瞬、宿の部屋かと思ったが、違った。大きさは同じぐらいだが、バラが活けてある高そうな花瓶、見るからにふかふかなソファ、大理石のテーブルとまるで貴族の寝室と言った感じた。

私はどうしてこんなところにいるんだっけ……？

そこまで考えが至った私ははっとしてドアへと飛びつく。

ドアには鍵が掛かっていた。

……私をどうするつもりなのかしら。

衣服に乱れは無い、ということは身代金目的の誘拐？見るからに旅人の私を誘拐するわけもない。

私は少しでも手がかりを見つけようと感覚を研ぎ澄ませた。

そして……微かな揺れを感じ取った。

船の上……ということ……？

少ない情報で考え続ける私の思考を、ノックの音が中断させた。

「陛下、麗しきご尊顔を拝し光栄です。」

「そなたが魔物退治を生業としておるものか。それにしても随分と若く見えるが……？」

「14です。確かに陛下、魔物退治は多くの経験を積んでこそその職業ですが、私にはそれを補ってなお余りある才能がございます。」

「はっはっは、そこまで自信があるのかそなたは。」

王の間。両側には兵士（黒いローブを着ている魔導師が多い）がずらっと並び、すごい大風呂敷を広げる俺を呆れたような目で見ていた。ベルフェを襲った兵士とは服装がかなり違っていたので、あいつらはゴロツキか他国の兵士だったのだろう。

そして肝心のセラティエル王は緑のローブだけで特に装飾品の類はつけていない、初老の男だった。王冠がなくて玉座に座っていないければ王と気づかないかもしれないぐらい、その格好は質素だ。

「最近は新たな魔物が増えてきておる。その魔物を退治するには力

だけでなく臨機応変に対応しうる発想が必要であろつが、それがそなたにあるか？」

「無論です、陛下。」

「・・・1つ試験を課そう。これにクリアしたら資金を提供する。存分に魔物退治に専念してくれ。」

そこでセラティエル王は言葉を切り、2 m程の杖で床をたたいた。

「我に忠実なる下僕よ、今己の力を示さんとする若者に試練を与えよ。」

その言葉が終わると、俺の両側の床から2体の人形が沸いて出てきた。透明だからおそらくガラスか氷で出来ているのだろつ。

「その人形を倒せ。それが試験だ。」

こんなところでやるんですか、と思つたがよくよく見回してみると兵士が後ろに下がつたために十分な戦闘スペースが確保されていた。

「始めよ。」

その言葉と同時に、等身大の人形が殴りかかつてきた。

「入つていいですかあゝ？」

身構える私が思わずへたり込んでしまいそうになる気の抜けた声。

「いいも何もないでしょう」

ぶつきら棒に答える私だが、相手はどうやらそれを肯定の返事と受け取つたらしい。

ドアを開けた。

第1印象・・・黒い。

その人物は私やイワキさんと同年代ぐらいだろつ、黒いドレスを着て緑の髪をツインテールにした、女の子だつた。

端正に整つた顔立ちだつたが、何か不吉なものを感じさせる違和感があつた。

一瞬後にそれが言葉になる。この少女は瞳が赤かつた。

魔物・・・？

「私はベルフェゴール、あなたは？」

「ベラドンナ。あなたをここに連れてきた人達の首領、といったところかしら。」

「まず魔物臭い。」

「なぜこんなことを？」

「フフフ、ちよつとイワキリ君とお話したいと思ってね、まずお友達のあなたから招待したわけよ。」

「私をえさにおびき寄せようというのか。」

「私は舌を噛み切ろうとした。」

「！！、ちよ、何やってるのよ！」

「不吉な少女も私の自傷行為には驚いたらしく、私を突き飛ばした。」

「イワキリさんに迷惑かけるわけにはいかないわ。」

「知り合つて1日そこらの人になぜそこまで出来るのか、私自身よく分からなかった。でも気づいたらそうしようとしていた。」

「あらあら・・・正直あなたにはあんまり興味無かつただけど、あなたつて結構面白いわね。でも・・・」ふと少女は真顔になつて言った。

「あなたの命の価値はそんなもんじゃないでしょ？」  
・・・。

命の価値？

そんなこと、考えたことも無かつた。

「今イワキリ君を呼んでるから、ゆつくりしてってね。何か必要なものがあつたらドアの近くで大声出してもらえれば部下が持つてくるから。じゃあね。」

言いたいだけ言つと、少女はさつさとドアから出て行ってしまった。私はソファに座つた。

ふと、取りとめないことを考える。

私が死んだら、イワキリさんは悲しんでくれるかしら？

人形は強かった。しかし俺はもつと強かった。

格闘技のお手本のような突き、蹴りを繰り返す2体、互いに間違つてぶつかるなんてことは無い見事な連係プレー。

普通の人間なら避けられないような攻撃を、俺は刀を出さず体裁きだけでかわしている。

剣道部のエースだとしても不自然なくらい完璧に対応しきる俺。

レリウーリアの言っていた俺の「才能」。

おそらく「視力」のことだろう。

俺の優れた静止視力と動体視力は、1km先の看板の文字を読んだり銃弾を見切ったりすることを可能にしていた。

無論、見切れるから体が反応できるというわけではない。しかし俺はこの異常な視力に対応できるように凄まじい筋力トレーニングを重ねた。

俺は才能を「生かす」ことも知っていた。ということだ。

今ではどんなスポーツでも花形。

（そして今も役に立っている、と・・・）

俺は避け続けながらこの2体をどう倒すか思案した。

そして考えがまとまると、俺は2体から大きく間合いを取った。

正直あんまりやりたくないのだが、背に腹は代えられない。

俺は刀を「背中から抜いた」

そう、王城に入ってから今まで、俺は刀を出したまま背中に紐で縛り付けておいたのだ。

出したり消したりできることを知られないようにするための小細工。しかし時に、小細工が大仕掛けよりも有効に働くことがある。

俺は2体に刀を投げつける。

ブーメランのように回転しながら飛んでいく刀、人形は簡単にかわす。



そしてチャンスとばかりに近づくと「同時に」殴りかかろうとした。機会は一度きり、2体同時に倒さなければもうこの小細工は通用しなくなる。

今まで交互に連係プレーを行ってきた人形。そのままでは2体同時に倒すことが出来ない、故につくり出した見せかけの隙。

人形はそれに乗った。

射程に入った瞬間に、俺の手に戻った刀は2体の頭を粉々にした。さらに念を入れて胴もたたつ切る。

「そこまで」

王の言葉にそれまで騒然としていた兵士が静かになった。

「人形を同時に葬るその知略、まさかこれほどとはな・・・そなた、魔物退治もよいが我が軍の教練係にはなつてもらえぬか？あまりに、惜しい人材だ。」

あれ、刀が一瞬にして手に戻ったことにはツツコミ無しですか。

まあ魔法使いの国ではありますが・・・

教練係っていったって俺読み書きできないしね。

「身に余る光栄です、が、私は一介のハンターに過ぎません。私の能は魔物を狩ることだけですから。」

俺はやっぱり辞退した。

「そうか、それなら仕方ない。」

王は手を差し伸べると、空中から一枚の紙を取り出した。

「これがハンターの証明書だ。国内であればこれでどこへでも行けるぞ。」

「ありがたき幸せ。」

「・・・そういえばそなた、1人で狩りをしておるのか？もしそうなら優秀な魔導師を1人つけてもよいが・・・」

これは破格の待遇だな。

俺は考えた。

国の人間がついているのは、正直あまり嬉しくない。国外に行くとき何かと邪魔になるからだ。しかしエウリノームのこともある。も

しかするとその優秀な魔導師っていうのが新しい仲間なのかも知れない。どちらにせよベルフェゴールの欠けた今、戦力はなるべく欲しい。

俺は肯定の返事を返した。

「ローグはおるか？」

「は、ただいま。」

よく響くバリトン。

ベージュ色のローブをまとった男が前に出た。

顔は・・・フードを被っているためよく見えない。

「そなたにハンター、『イワキリ』の補助を命ずる。」

「御意。」

男はフードを取った。

・・・・・・。

この世界には色々と驚かされてきた。

しかしどれもこの比ではない。

知的な風貌。常に周りの状況を正確に把握する冷徹な眼差し。

補助の魔導師は文芸愛好会会長、鬼怒川 龍一だった。

## 第九話

城の門から出るまで、俺達は無言だった。

俺はあの顔を見たとき「部長」という言葉が喉まで出掛かった。が言わなかった。

世の中には（ここは異世界ではあるが）同じ顔の人間が3人はいるって言うし、今、ここで部長に会うなんてのはそれこそ南極でホツキョクグマを見つけるに等しい確率だ。ありえない。

大体もし部長なら俺を見たときに何らかの反応を見せたはずだ。

それに王は言っただじゃないか「ローグはおるか？」って。

以上の事実から俺はこの人物を部長とは別人と判断した。

「色々にご迷惑をお掛けするかもしれませんが、何とぞよろしくお願いします。」

取り敢えず俺が口火を切った。

「……………」

部長似のこの男はじろり、とこちらを一瞥するとまるで聞こえなかったかのようにそのまま歩みを進めた。

「……何か失礼なことを言ってしまったんだろうか。」

「あの……何か失礼なことを……」

「こういう時は直感を信じる。生半可な推測は間違った判断を生む。岩切君には私が鬼怒川龍一以外の誰かに見えるのか？」

「……マジで部長でしたか。」

「いや……何と言いますか、こんなところで会うことになるなんて……」

「私も君を見たとき驚いたよ。」

ぜんっぜん驚いているようには見えませんでしたか……

「先輩、仕官しているってことは、ここでは長いんですか？」

「文芸愛好会の会合があった日の帰路で『英雄ツアー』のパンフに吸い込まれた。ここでは3ヶ月ってところだな。君はいつ、ここに

来たんだい？」

「飲み込まれたのは同じ日です。ここではまだ一日しか過ぎてません。あ、後スタート地点は森でした。」

「そうか・・・一人でここまで来るのは大変だったろ？」

「いや、数時間後に森に住んでいる女の子に会って、その案内で来たんです。」

ベルフェゴールの話はあんまりしかなかった。どうしても彼女の輝く笑顔がまぶたの裏にちらついてしまう。

「ほう、それは奇遇だな。私はタグリヌスの砂漠からのスタートだったが、私もその住人に助けられた。まるで運命の流れに乗せられているようだ。あのままなら私は餓死してた。」

部長はちよつと笑った。たぶん冗談で言ったんだろうが、俺は「運命」という言葉にはつとまった。

ありえない、と言うほどでもないが、ちよつと出来すぎてやいないだろうか？ 2人の異世界から来た男が、理想的とは言えない環境から冒険を始めて、程なくして住民に助けられるなんて、まるであらかじめそうなるように仕組まれていたみたいだ・・・

先輩の言葉が、俺を思考の海から引き上げる。

「私はツアーコンダクターを名乗る人物から魔物退治を命ぜられたが、君のミッションは？」

レリウーリアのことを言っているのだろう。

「同じです。武器を奪ってこいと。」

「なら都合がいいな。これから行動をとにも出来る。君みたいに強い男と冒険できるとは心強いよ。」

先輩もおそらく俺の闘いを後ろから見ていたのだろう。それは本心から出た言葉に違いない。

・・・しかし、どうもこの人の口から発せられると全部皮肉に聞こえてしまう。

つくづく損な人だ。

・・・いや、そう思うのは俺だけか？

「先輩は戦闘経験はありますか？」

「ライオンほどの大きさの魔物を3体、盗賊を1000人程叩きのめしたが、それだけだ。」

それだけって先輩・・・

ってか先輩魔導師じゃ無かつたんですか？

叩きのめしたって、思いつきり物理攻撃じゃ・・・

「あの、失礼ですが、先輩はどんな魔法が使えるんですか？」

「さつき話した砂漠の住人が魔導師だったんでな、その人に弟子入りして本来3年で修める魔法の基礎を2ヶ月でマスターした。火、風、水、土の4大元素ならある程度使えるよ。」

3年掛かるところを2ヶ月。普通ならあり得ないが、俺は信じた。1日で200枚の原稿を仕上げるという偉業を成し遂げた部長の集中力はある意味、俺の視力より驚異的だ。

先輩によると、魔法はこの4大元素に大分されるらしく、それぞれを組み合わせて使うらしい。

また良くファンタジーにありがちな「魔法学校」みたいなものも無く、魔導師の家に住み込みで修行をするそうだ。そのため呪文を詠唱する、しないや魔方陣を使う、使わないなど数多くの流派があるとのことである。

うゝむ、強い。戦士とかと比べて魔法使い優遇されてるよこりゃ。

「魔導師はやっぱり、限られた人間しかねないんですかね？」

「そんなことは無いが、向き不向きはあるな。相当な努力と想像力が必要な職だから皆あんまり外に出ない。少なくとも運動好きにはなれないよ。」

運動好きにはなれない職、か、なるほど。

となると身体能力は皆劣っているということか。

魔法だって発動に数瞬の間が必要だろうし、俺が思ったよりは魔導師は強くないみたいだな。

「ま、私は例外だがな。本来魔法の練習に当てる時間を・・・」

そついうと部長は右手を前方に差し出す。

杖がその手に出現した。

長さは2mくらいだろうか。手首ぐらいの太さの鉄棒になにやらわからない文字が隙間無くびっしり刻まれた得物だった。

王の杖みたいに宝玉ははまっていない。

「魔導師の最大の弱点とも言える接近戦の練習に使った。」  
ピツと杖を振る。

剣道部のNo.2とも言われたかつての部長の振りよりも、それは更に速かった。

これなら盗賊相手に肉弾戦でも引けを取らないだろう。

・・・もしかすると今の部長の実力なら俺に匹敵するかもしれない。

「それが『英雄の証』ですか？」

「そうだ。君の刀と同じく、出したり消したりできる。」

「頼りにしてますよ、先輩。」

「そついう君も強いだろうが。」

俺達は顔を見合わせて少し笑った。

「そいつ」が視界に入るまで、俺達は無言でエームへの道を歩いていた。

「あれ、あの人がやってんでしょうね？」

「む・・・邪魔だな、あの男。」

エームへと通じる間道で、その男は立ちふさがっていた。

「イワキリさんで間違いありませんね？」

10mほど近づいたところで、男はいきなり声を掛けてきた。

そいつは灰色の上着に灰色のスボン、灰色のコートを羽織っていた。その顔からは表情が抜けきっている。おそらく人を傷つけても罪悪感を感じないタイプだろう。

正直に言うかちよつと迷った後、俺は答える。

「まったくその通りだが、なんの用だろうか？」

「僕」の任務はイワキリという男を「船」へと導くこと。

初めベラドンナ様から聞いたときはそんな連絡係にやらせるよ、  
と思ったがこうしてその人物を前にしてみても、俺のこの仕事に対する意識が変わった。

その鋭い目は、直感と観察結果とを合わせて考慮し、正しい結論を出せるタイプの人間だと語っていた。並みの人間では例え切り札を持っていたとしてもこの男を船へと引き込むことは出来ないだろう。警戒される。

だから「僕」が抜擢されたのだろう。

「ブルー・ワイルドエンジェル」交渉係のこの僕が。

しかし・・・隣の魔導師の男。

かつてタグリヌスの盗賊に「虐殺墮天使」と称された賞金稼ぎだ。

「僕」もこの男に両腕を叩き折られた。

向こうは気づいていないようだが・・・

どこに消えたのかと思ったら、セラティエルに仕えていたのか。

この男が側にいるのは厄介だ。「ブルー・ワイルドエンジェル」の名前で脅迫することが出来ない。

引き離さなければ・・・

僕は「交渉」を開始する。

「あなたは確か、ベルフェゴールさんと仲が良いようですね。そんなあなたに伝えるのは心苦しい限りですが・・・」

「ベルフェゴールがどうしたっていうんだ？」

イワキリの顔が僅かに歪む。どうやら感情を隠すのはうまくないようだ。

「ちよつとまあ、我々の方で『お預かり』してるんですよ。無論お怪我の無いよう丁寧に扱ってはおりますが・・・」

イワキリは手に刀を出現させると、無言で僕の喉に突きつける。

「僕はあなたにこの事実を伝える伝言係であり、ベルフェゴールさ

んのいる場所まで案内する案内係です。僕を殺してもあなたにとつて得はありませんよ。僕の代わりなんていくらでもありますから。」

ま、代わりがいるっていうのは嘘だけど。

僕はちよつと言葉を切り、続ける。

「あなたにお願いしたいのはほんの、少しばかりの『代金』です。そうすればベルフェゴールさんをお返しします。」

僕はベラドンナ様愛用の水晶玉を取り出す。

それは空中に浮かぶと光を放ち、部屋に監禁されているベルフェゴールの様子を映し出す。

「この通り無事です。来ていただけませんか？」

「ここに連れてくるんだ。」

「それはできません。ベルフェゴールさんに途中で逃げられてしまったら、信用してないあなたは僕達を殺すでしょう？あなた程強い方を、僕達の誰かがどうこうできるわけありません。国の直属のハンターでしたら僕達の欲する『代金』なんてすぐに手に入られるでしょう？あ、後お連れの方には申し訳ありませんが来るときはイワキさん1人で、ということをお願いします。魔導師の方に攻撃されたらひとまりもありませんから。さて、少し時間を取りましょう。よく考えてください。」

結果は見えているけどね。

なんてことだ・・・俺がついていれば・・・

俺は横にいる部長に事情を話す。

「なるほど・・・君が世話になった女性が、別れた街で誘拐された、ということか。」

部長は唇を舐める。言うか言うまいか迷っているときの部長の癖だ。  
「今から私はひどいことを言うが・・・どうか怒らないで聞いてほしい。その女性だが、「見捨てる」と言うのも1つの手だぞ。」



「え・・・」

「我々の目的は魔物退治だ。戦力も2人で十分だろう。」

俺は思わず部長を睨みそうになり・・・こらえた。

あくまで部長は「選択肢」を提示しているに過ぎない。俺は観察眼には結構自信がある方だが、感情的でその目が曇ることも多い。

その点部長は恐ろしく冷徹だ。感情の起伏が無いわけでは無いが、それが思考に結びつかない。自分の取りうる行動全てを冷静に分析し、いくつもの選択肢を導き出す。

・・・まあそれもキレてなければ、の話だが・・・

「・・・俺はその選択には反対です。ここで助けに行かなければ名折れです。」

「君ならそう言うと思った・・・もし本当に『見捨てる』って言うたらどうしようかと思ったよ。」

にやり、と笑う部長。

「無論、ただ敵の身代金の取引に応じるだけではつまらない。隙についてその女性を助け出し、逃げる。そのつもりだろ？」

「いや、違います、先輩。」

俺もにやり、と笑う。

「逃げるのではなく、足腰立たなくなるまで叩きのめしてやります。」

「

「さて、時間です。そろそろよろしいですか？」

「僕」は問いかける。

「行くよ。ただその前にいくら払えばいいのか教えてもらえるかな？」

僕は金額を告げる。それは本当に大した金額ではない。本来の目的ではないからだ。

「僕」はもう部屋の様子を映していない空中の水晶玉に告げる。

「水晶よ、己の片割れとの間に道を作り、僕と客人を通せ。」

水晶玉がさつきと同じように光り、ドアへと変わった。

「ここをくぐれば僕達のアジトです。」

ベラドンナ様に目通り叶うとは幸せな奴だ。

俺は先輩に言った。

「エイムの街で待ち合わせましょう。」

「む、理解した。」

俺は敵地に赴くべく、刀を仕舞うと服装を整えた。

案内係に促され、俺はドアを抜けた。

## 第十話

頬に激しい風を受けている。

ベルフェゴールを誘拐した奴らのアジトは船の上だった。

大航海時代の海賊船のような、マニアが見たら喜びそうな外装だ。俺はその甲板に立っている。

船の「下」を覗き込むと雲と砂漠の山が「眼下に」見えた。

・・・そう、こいつらのアジトはファンタジーにこれまた付き物の「空飛ぶ船」だった。

航海技術発達してないんじゃないかなったんですかねこの世界は。

・・・あ「航空技術」だからいいのか。

とりあえずここから逃げるのは無理だと言うことが判明した。

「こちらへどうぞ」

案内係が俺を呼び、船室への扉を指した。

俺は体に緊張をみなぎらせ、後について行った。

「入るわよ」

ソファに座り込んでいた私の耳に、ベラドンナのはしゃいだ声が響く。

ドアが勢いよく開かれ、嬉しそうな彼女の顔が覗く。

隣には緋色のジャケットをまとったショートカットの少女がぼんやり立っていた。

地味な顔立ちのせいかな、派手な格好をしているにも関わらず影が薄い印象を受ける。

彼女も誘拐グループの一味なのだろうか。

「ちよっとついてきて。あ、後念のために縛らせてもらっわよ」  
・・・あれ？

私は体全体を見回した。

服の上から細いワイヤーが何重にも巻きつけられていた。

これでは腕を動かすことも出来ない。

私はショートカットの少女を見た。

彼女は我関せず、といった感じであらぬ方を見ていたが、私に巻きつけられたワイヤーの先は

彼女の手にしっかりと握られていた。

いつの間に・・・

確かに今、ベラドンナと話していて彼女への注意は逸れていたが、こんな芸当が出来るなんて・・・

こんなのが後何人いるのかしら。

目下逃げる予定であった私は、考えていたよりも難易度が格段に上であつたという事実にげんなりしてしまった。

非常に広い船内を、一味であろう乗組員がテキパキと動いている。

服装は統一されていないが、皆伊達好みなのかかなり派手だった。

俺と案内係が入ってくるや否や、働いていた船員は素早く通路の脇に並んだ。

まさに一系乱れぬ整列。

・・・こりや並の軍隊より規律正しいな。

通路の奥、明らかに他の船室とは違った凝った装飾の扉があつた。

「この奥に私達の首領とベルフェゴールさんがいます。」

この奥に、ベルフェゴールがいるのか・・・

あんな風に別れた俺を、どう思っているのだろう。

周りの誘拐グループなんかよりも、ずっとそっちの方が気がかりだった。

「準備はよろしいですか？」

案内係が俺に声を掛ける。その顔は微笑していたが、俺にはそれが

本心から笑っているのではないということが分かった。

酷薄な笑み。

あのエウリノームの狂氣的な笑顔とはまた違った意味で、それは俺の神経を逆なでした。

直感が、こいつは危険だと告げている。

・・・早く離れたいな。

俺のそんな気を知ってか知らずか、案内係は扉を開ける。

「ベラドンナ様、イワキリを連れて参りました。」

広い部屋の中には古風な木製の家具が配置され、向かって右手には大量の本を収めた本棚が並んでいた。

そして正面に、3人の少女が立っていた。

1人はベルフェゴール。俺を見て驚いたような顔をしている。どうやらワイヤーで拘束されているようだ。

その先端は赤いジャケットの少女の手に握られている。その少女は、まるでこれから起こる事は映画の中の出来事のように自分とは関係ない、といった態度で窓の外をぼけっと見ていた。

そして最後、黒いドレスの少女が俺に笑いかける。

「ようこそ、私達の船に。私の名前は・・・」

「興味無い早く用件を言え。」

俺は間髪入れずに口を挟む。こういうやり取りは相手のペースに乗せられたら負けだ。

しかし相手はまったく動じていなかった。相変わらず微笑んでいる。俺は続ける。

「身代金は俺をここに誘い込むための口実だ。本当の目的はそんなんじゃない。俺じゃなければならぬ何かだ。そうだろ？」

「さすがはセラティエル国王に認められたハンター。強いだけじゃなくて頭もよろしいようね。そう。私の目的は全然違っわ。私の目的はね・・・」

そこで黒い少女は小首を傾げ、上目遣いで俺を見る。

その可愛らしい仕草に、思わず引き込まれてしまいそうになる。

「あなたに仲間になつてもらふ事よ。」

「なんだと・・・？」

「私達、各所の遺跡を荒らしたり、お金が余っている王侯貴族からお小遣いを頂いてる『ブルー・ワイルドエンジェル』って盗賊団なのよ。今では一國を治めるまでになった。・・・でもそんな私達でも、魔物がはびこっている遺跡までは荒らせないの。でもそこには素晴らしい魔法の掛かった宝物があるはずなのよ。それで私、専門家であるハンターを探していたわけ。そしたら10日前に夢でお告げを聞いたの。『汝の欲する英雄は、セラティエルに現れるだろう』ってね。そんなわけであなたにたどり着いた。ね？仲間にならない？盗賊って自由な職業よ。実入りも悪くないし、魔物の遺跡の魔具があれば、きつと5大陸だつて手に入るわ。」

「なるほどなるほど。それで人質とつて選択を迫っているわけですか。さすがは盗賊というか、頭下げて頼むのが嫌いみたいだな。そんなお前達の仲間なんかには・・・」

そこまで言うつと、だるそうな顔の赤い少女が初めて動いた。

手に持つワイヤーの一本を強く引つ張る。

「痛っ！！」

ワイヤーと接しているベルフェゴールの右腕から血がにじみ出る。

「きちんと働いてくれたなら、もちろん解放してあげるわよ。でもそれまで彼女はわ・た・し・の・も・の」

黒い少女がベルフェゴールの髪を撫でながら歌うように言った。

俺は理性を総動員して、刀でバラバラ死体にしてやりたい衝動を抑える。

どうすればいいか、と言っても今の選択肢は2つだけ。下僕になるかベルフェゴールの死か。

こんなの天秤に掛ける気にすらならない。

「分かった。分かったよ。仲間に・・・」

「ならないで下さいイワキさん！！あなたの口からそんな事聞くぐらいなら私は死にます。」

ベルフェゴールが叫んだ。

・・・もつと素直な子だと思っただけだね。

しかし俺もベルフェゴールの声で我に返る。

今黒い少女が意図せんとしているところはすなわち、俺の選択肢を狭めること。

そのために人質を取ったのだ。

だったら人質を取り返せばいい。

・・・正直、今俺が考えている選択がベストだとは思えない。

しかしここで要求を呑むわけにはいかない。

そんな姿見たら自殺する、というベルフェゴールの顔はマジだ。

人質を死なせるのは英雄のすることではない。

俺はいちかばちかに賭けた。

「っあああ!!」

叫びながら、俺は窓の外を指差した。

無論そこには何も無い。

しかし人間の心理と言うものは不思議なもので、誰もこんな状況でくだらない引っ掛けなんてやるとは思わないから、迫真の演技であればあるほど・・・

引つかかってくれる。

案の定、部屋にいた俺を除く3人が、窓の方を見た。

その瞬間、俺は赤い少女に走り寄ると、思いつき突き飛ばした。

そしてワイヤーを巻かれたベルフェゴールを抱えて、部屋を走り去った。

・・・。

部屋の中を、沈黙が支配した。

といつても、ほんの数秒ではあったが。

最初に沈黙を破ったのは灰色の青年だった。

「は、早く追いかけてねば！」

しかしベラドンナが遮った。

「なんで急ぐ必要があるのかしら、どうせここは船の上よ。逃げようがないわ。」

「し・・・しかし、どこかに隠れられては・・・」

「この船のことを何一つ知らないあの2人が向かうのは、甲板ぐらいいかないわ。おそらく、イワキリは死に物狂いで戦うつもり。2人ともみんなを甲板に集めて。」

「はー!!」

灰色の青年は答える。

赤い少女も無言で頷く。

ベラドンナは二人が出て行ったドアを見ながら考える。

正直、あんまり無益な殺生はしたくない。

しかしこの船の存在を広められるのは困る。

殺すしかない。

「断るなんて、思ってたからね・・・」

英雄を自分の手に掛けなければならぬ不運を嘆きつつ、黒い少女は緑の髪をかきあげた。



## 第十一話

船の甲板、船首付近にたどり着いた俺は一息ついてベルフェゴールを下ろす。

今まで抱き上げられていたためか、ベルフェゴールは顔を真っ赤にして俯いている。

「あの・・・イワキさん・・・その、さっきは無茶言ってごめんなさい。私・・・恥ずかしいです。」

・・・顔赤くしてたのはそれが原因ですか。

俺は無言でワイヤーを取り去る。絡まっているところは無理やり刀で切断した。

そして深呼吸して、言った。

「よく聞いてくれベルフェ、知つてのとおりこの船は浮いている。」

「え！！そ、そうなんですか！？」

下を覗き込んで驚きの声を上げるベルフェゴール。

・・・もしかして知らなかった？

海だと思つててここから泳いで逃げるつもりだったの彼女？

だからあんな強気な発言したのか・・・

そりゃ、何人いるかも分からない盗賊全員倒すよりそっちの方が楽だもんね。

「・・・まあ、そういうわけで、逃げられない。」

「じゃ、じゃあ・・・。」

「そう、敵を全員倒して船に乗っ取るしかない。」

「私はどうすれば・・・。」

「ベルフェ、君は俺を信頼してるかい？」

「そりゃもちろん。」

「ならここは俺に任せてくれ。後俺から離れるなよ。」

「・・・分かりました。」

一緒に戦えないのが不満な様子だったが、武器が無い以上彼女には

そうしてもらうしかない。

「作戦会議はもうお終い？」

黒い少女の勝ち誇ったような声が響く。

見回すと今まで働いていた盗賊が、武器を片手に俺達を取り囲んでいた。

包囲網は距離にして約10m。

数は・・・300、といったところだろうか。

きついでこれは。

俺は舌打ちした。

「さてと・・・何か言い残すことある？」

私は取り敢えず聞いた。

私は別に楽観主義者というわけではないが、300対1ではどう考えても勝つだろう。

魔物の巣窟に攻め入らないのは、力が無くて落とせないからではない。

あまり犠牲者を出したくないからだ。

盗賊と言うのは隙を突いて盗み出すのが本分。戦士のような戦闘屋ではない。

といっても無論、見つかったら戦闘になるわけだからちゃんと訓練はしている。

しかしそれは人間相手の訓練である。魔物と戦う訓練はしていない。苦戦必須。

中には暗殺を得意とする戦闘に長けた「異能持ち」がいるのだが、悲しいことに全員が対多数戦闘には不得手な能力だった。

隣の赤いジャケット着たソテツちゃんもそう。

ワイヤーを操る技術はほとんど神域に達しているが、突っ込んでい

くような戦闘スタイルではない。

と、私が思考していると、向こうから返答があった。

「もっとさ、面白いセリフ無いわけ？それじゃあ月並みすぎると思うよ。うん。」

あくまでペースを崩さないか。

私は唇を吊り上げる。

「あなたは絶望の淵に立たされているわ。例え私達全員を殺せたところで、決して逃げ切れない。さっきあなたがセラティエルに仕官したのを、どうして私が知っていると思う？」

そう問いかけるとイワキりははつとしたような表情になった。

そう、仕官の話は私が知りうるはずの無い情報。

それを私が知っている、というのはつまり・・・

「王宮に内通者がいたのか・・・？」

「よくできました。私達盗賊団はあらゆるところに仲間がいるの。いつかはあなた達を見つけ出して殺すわ。」

私は言葉を切り、続けた。

「今からでも遅くない。ベルフェゴールを差し出して私達の仲間になりなさい。」

もう、この男は断れない。

船に乗っ取っても逃げ切れないと分かれば、選択肢は1つしかない。私はとっておきの笑顔を・・・向けようとした。

『あれ』がイワキリの背後の上空に浮かんでいるのを認めるまでは。そんな・・・どうして、どうしてこんな時に限って・・・

思わず呟いてしまう。

本当に、今だけは来て欲しくなかった存在。それが来てしまった。

「なんだ・・・？どうしたんだ？」

今まで戦闘態勢を取っていた盗賊たちが突然動揺し出したからだ。俺は後ろを振り返った。

「ここぞ、という時に助けに来る・・・英雄の王道、<sup>ヒロイック</sup>というやつだな」

「なんで先輩がここにいますか・・・」

盗賊を動揺の原因は、俺の背後の空中に浮かんでいる部長だった。鉄の杖の上に乗ってサーファアの様<sup>よう</sup>に船に追いつがっていた。

ベルフェゴールが事の展開についていけずに部長に問いかける。

「あ、あの、あなたは・・・？」

「話は後だ、とりあえずこの杖に飛び移れ。」

「わ、分かりました。」

「っ、あの男を殺りなさい！！」

その言葉に我に返った盗賊たちが、部長に向けて矢を放ったりナイフを投げつけたりした。

「邪魔だおめえらあひゃひゃひゃひゃ」

戦闘状態という異常な心理の中で、部長も「凶暴」な一面を見せ始めた。

部長の目の前を横殴りの突風が吹いて、盗賊の攻撃を全て吹っ飛ばしてしまった。

「てめえら俺を殺そうとするって事はよ、自分の死ぬ覚悟もできてるって事だよなあああ！」

部長は今まで自分の背後に回していた右手を掲げた。

その手にはバスケットボール程の火の玉が乗せられていた。

そして、盗賊の方に投げた。

「俺からのプレゼントだぜええええええ！」

・・・今後絶対に部長は敵に回さないようにしよう。

火球は拡散し、あわてふためく盗賊達を、まるで抱きしめるかのよう<sup>よう</sup>に包んだ。

「早く飛び移るんだ！」

その声に我に返り、ベルフェゴールを促して自分も杖に飛び乗る。  
3人を乗せた鉄杖は方向転換し、一気に戦場から離脱した。

「まったく、最悪ね、ほんと、最悪。」

3人が飛び去った方角を見ながら、私はため息混じりに言った。

3人が視界から消えた時点で手下を包んでいた火炎は消失していた。  
全員軽症。

無論そんな事じゃ私の心は晴れない。

さっき「逃げ切れない」と言ったのはハッキリ。仲間は各地に多く  
いるが、あの3人を相手に出来るのは正直少ない。

イワキリを動揺させて、仲間に取り込むようにと言っただけ。

でもその小細工も「虐殺墮天使」の登場で無駄に終わった。

「でも殺す、絶対に殺すわ。」

各地に散らばる密偵では殺せなくとも、暗殺専門の「異能持ち」な  
ら殺せる。

この時点で私の「無益な殺生はしたくない」という甘い考えはどっ  
かに消えていた。

目を付けた物は、手に入れるかぶっ壊す。

それが有益か無益かなんてことは関係ない。

引き込めないのなら殺すまで。

それによって私のプライドは保たれる。

今鏡を見たら、きっと私の赤い瞳は怒りと期待で宝石のように輝い  
ているだろう。

私の口元が自然と、綻んだ。

## 第十二話

俺達3人を乗せた鉄杖はしばらく飛行した後、ゆっくりと砂丘へ着陸した。

見渡す限り一面の砂漠。

部長のスタート地点がタグリヌスの砂漠だという話だから、ここがタグリヌス国なのだろうか？

部長が口を開いた。

「自己紹介がまだでしたね。セラティエル国軍第三部隊所属、今はイワキさんの補助を任されているローグ・ベイモンと申します。以後お見知りおきを。」

ベルフェゴールに向かって優雅に一礼する。偽名使ってんですか先輩。

・・・それより部長。いくら俺達の間係を知られたくないからって、今までため口だったのにいきなり敬語じゃ怪しすぎですよ・・・案の定、ベルフェゴールはすぐに感づいた。

「あの、イワキさんとは・・・？」

「え？それは、まあ、主従関係・・・」

「先輩もういいですって。」

俺は先輩に言った。

そしてベルフェゴールに向き直る。

「ベルフェ、一緒に旅を続けてくれないか？」

唐突な質問に彼女は少し驚き、そして笑顔で答えた。

「もちろん、イワキさんがそう望むのなら、喜んで。」

「そうか・・・。ベルフェ、今から俺は実に信じがたい話をするけど・・・」

「おいイワキ・・・さん」

俺を止めようとする部長。

俺が何を話そうとしているのかに気づいたのだろう。

しかし俺の決意は揺るがない。

ここまで来て彼女を突き放すわけにはいかない。

・・・なんていうのはただの建前。本音は一緒に旅したい。それだけ。

でもま、理由はそれだけでいいだろう。言う必要性なんて考えるだけ馬鹿らしい。なんてったって俺は直感で生きてきた人間なんだから。

「俺達は異世界・・・つまりここではない世界から来たんだ。」

「・・・え、そ、それは一体・・・？」

「この世界の魔物を倒すために、別世界から連れて来られた一般人ってわけよ。」

俺は話しつつ、ベルフェゴールを観察する。

その顔は困惑で塗られている。

「海の向こう・・・ってことですか？」

「いや、違う。んゝなんて言えばいいのかな・・・俺もうまく言えないんだけど・・・」

「じゃイワキさんは魔物をを退治するために天から遣わされた天使、ってことですか！？」

「いやいや、俺はそんな大層なもんじゃないんだよほんと。ただくじに当たったつてのと同じ程度だから。」

「・・・でも、イワキさんは天から見込まれたから魔物退治を使命されたんでしょう？」

「まあそれはそうなんだけどね。俺達をここに来させた奴によると、魔物退治自体が目的ってわけじゃないみたいなんだ。あくまでそれは手段・・・」

ここで俺は言葉に詰まった。

魔物を退治することでその地に英雄伝説を残し、信仰の対象にさせる・・・

はたしてそこまで言っていていいものなのか。ベルフェゴールだってこの世界の「住人」だ。

その「住人」に真の目的を話してしまうのは・・・

俺が迷っていると、部長が助け舟を出してくれた。

「まあ最終的な目的は我々の成長かな。魔物退治するという艱難辛苦を乗り越えられれば何かを得られる、ってね。そんな感じた。」

さすがは部長というか、うまい誤魔化しだな。

ベルフェゴールは困惑していた顔に、今度は驚きと感動を浮かべうつとりとなっていた。

「そんな素晴らしい方たちと冒険できるなんて・・・私って本当に幸せですね。」

「そう言っただけとありがたい。」

部長も笑って答えた。しかしふと真顔に戻る。

「さて、そういうわけで我々は魔物退治に行くわけなんだが・・・」

顔を伏せながら言った。その表情はまるで皿洗いを手伝っていた子供が誤って皿を割ってしまったり、障子を破ってしまった時に見せる表情だ。

普段の部長なら絶対見せない顔。

俺は不安になって言った。

「・・・何か問題があるんですか？」

「ここは盗賊共がはびこっているタグリヌス国だ。だからすぐにでも他国へ移動しなければならぬのだが・・・不覚を取った。」

「怪我したんですか？」

そういうと部長はゆったりとしたローブをまとった左腕を上げた。

肘辺りから先の布が垂れ下がってしまったっている。

俺は数瞬後、事の大きさを知って青くなった。

「！！、ちょ、先輩、う・・・うで！」

「どうやら戦闘中に斬られてしまったらしいな・・・一体誰が、どうやったのか想像もつかん。」

「そんな事よりも先輩止血！」

「あわてるなイワキリ君。水系統の呪文で患部を凍らせているから止血は済んでいる。」



「あのローグさん、これから片腕で冒険するつもりだったんですか・・・？」

シヨックから立ち直ったベルフェゴールが言った。

「そうですね先輩、これから・・・どうするんですか？」

「義手を作って貰う。幸いあてはある。」

そう言うのと不敵に笑った。

ついさっき片腕を失った人間が見せる顔ではなかった。

その豪胆さ、冷静さ。

部長とはもう2年間の付き合いになる。普段の学校生活でも決して甘く見ているつもりは無かったが、この人物はそんな俺の認識を遥かに超えた傑物だったようだ。

改めて部長を見直したところで、本人が「私の知り合いが近くに住んでいるんだ。」と言った。

そして辺りを見回し、「確かこの辺だったと思うが・・・」と呟く。俺もつられて周囲を見る。

地平線近くの砂山の上、小屋がぼつんと建っているのが見えた。

「先輩、小屋が見えますけど。」

「そこだ。そこに私に魔法を覚えてくれた師匠が住んでいる。あの人ならおそらく義手を作れるだろう。」

なるほど。確かに魔法の師匠って言うのは何でも作れそうな感じではある。

小屋へと歩いていく最中、俺はずっと気になっていた事を部長に尋ねた。

「先輩、どうしてあそこが分かったんですか？」

「君と灰色の奴が扉を通ったときにだな・・・」そこまで言うと部長は顔をしかめた。左の傷口をしきりにさすついているところを見ると、どうやら今になって痛んできたらしい。

まあ腕を無くしたんだから、当たり前と言っちゃ当たり前だが。

「ちらつと見えたんだよ、砂山とあそこの小屋がね。だからあいつ

らがタグリヌスのこの辺りにいることが分かった。別にそれだけなら君を追いかけてりせんのだが、あの灰色の男を見たときに誘拐した奴らが『ブルー・ワイルドエンジェル』だと分かった。あの組織が身代金誘拐なんてちゃんことするはずがないから、何か裏があると思って駆けつけたのさ。セラティエルとここは隣国だから距離的にも近かったしね。」

まさに間一髪。と部長は笑った。しかし額の冷や汗までは隠しきれない。

俺は痛みから気を逸らすだけでも、と思い会話を続けた。

「先輩、随分詳しいですね。」

「あいつらの私を見つけた時の反応を見ただろう？ 修行時代・・・と言ってもほんの2ヶ月なんだが、私はアルバイトと魔法の試し打ちを兼ねて賞金稼ぎをやっていたんだ。タグリヌスの盗賊を他の4国は良く思っていないかったみたいでね、依頼には困らなかったよ。そんなわけで仕事を重ねていくうちに『虐殺墮天使』だなんて通称名を貰ってしまった。」

部長の呼吸が荒くなる。掌の汗が砂の上に落ちて、瞬く間に吸い込まれていく。

これ以上喋らせるのは逆効果、と思った俺は船の上で起きたことを話すのを後回しにし、「もうすぐですから、頑張ってください」と声を掛けるに留まった。

砂山の一軒家、入り口の扉に倒れこむようにして部長は気絶した。

### 第十三話

夜も更けたころ、黒い少女と赤い少女が片や颯爽と、片やとぼとぼと、タグリヌス国の街道を歩いていった。

ベラドンナとソテツである。

「この辺だったかしら・・・？」

他国とは比べるべくも無い狭い道。屋台が立ち並び、なけなしの金で安い杯を重ねた酔っ払いが千鳥足でふらついている。

わき道にはぼろを纏ってうずくまっている人もちらほら。

それはホームレスと一言で表せないくらい悲惨な姿態であった。

「まったく、人生投げてるわね。」

彼女はため息をつき、遠くのタグリヌス城を眺めた。

月の光を背に受けているその城は、一見すると童話に出てくる西洋の城である。

しかし近寄れば、堀の水は緑色に濁っていて塀には草が生い茂っていることが分かる。

それは荒城。

栄華を極めたタグリヌス王家も落ちるところまで落ちたのだ。

その責任の一端を担っている彼女は少し憂鬱になった。

「もう少し、もう少しでタグリヌス国を完全に我が手にできる。そうすればきつと・・・」

王家が栄えていたときだって、いつも平民は苦しい生活を強いられていた。

だから私達盗賊団が支配すれば・・・

彼女の思考は、赤い少女に袖を引っ張られることにより中断させられた。

「ん？何かしら？」

ソテツは黙って路地の方を指差す。

そこは月の光が入らず、まるで地獄へと続いているかのように真っ

暗であつた。

「・・・・・・・・」

数秒考え、ベラドンナはソテツが言わんとしていることを理解した。近道だ、と言いたいのだろう。

ベラドンナは象牙を削り込んだような、細く白い指を顎に当てて考えた。

因みに、そういった無意識な仕草の一つ一つが様々な男を魅了することを彼女はよく分かっている。

自分が美しいということを知っていて、そして美しさは武器になるということも知っていた。

「まあ、近道と言っちゃ近道だけど・・・」

この道を通れば治安の悪い城下町のこと、暴漢に襲われるかもしれない。

「・・・・・・・・もちろん、戦って負けることなんて有り得ないが、あまり体力の無駄遣いはしたくない。

さて回り道するのとの道通るのと、どっちが早く着くでしょう？

「折角言ってくれたんだから、通りましようかね。」

その言葉を合図に、ソテツは歩き出す。

二人の少女は深い闇へと吞まれていった。

「まったく、入り口でぶっ倒れてるローグ見つけたときは驚いたね。いや、マジで。」

フランクな口調で俺に話しかける男は、みすばらしい椅子に座り、みすばらしい机に肘をつけている。

それらの家具は、ベラドンナの部屋のようにアンティークな雰囲気を出しているわけでもなく、家主にもっと丁寧に扱ってくれと非難の声をあげているように思える。

蝋燭の明かりでも分かるぐらいに汚い小さな窓から、月の光が床へ

と伸びていた。

周りの空間には、大量の本を詰め込んだ本棚がいくつも並んでいた。中の本のどれ一つとして埃を被ってないところを見ると、どうやら全ての本を定期的に読み返しているらしい。  
ある意味すごい。

時は1時間前までさかのぼる。

俺は倒れた部長に驚いて名前を呼び掛けているうちに、ベルフェゴールが大声で家主を呼んだ。こういう時彼女は俺と違って冷静である。

俺は最初、出てきた男が主人だと思えなかった。

二十台中盤、といったところだろうか。

さらさらの黒髪。細めの目。額から左の口角にかけての大きな切り傷が目立つ。

見目美しいと言っても差し支えない顔立ちを、それが台無しにしていた。

白髪の好々爺を想像していた俺は、出てきたのが執事が用心棒だと勘違いした。

「あの、すみません、この人が・・・」

「おおつ、弟子じゃないか。」

その男は屈むと部長の顔を覗き、「間違いない。」と言ってうんうんと頷いた。

そして部長の左腕が無いことに気づいたのか、「これは大変だ。」

と明らかに本心から言っとなさそうな感じでセリフを吐いた。

そして腰に差していた杖を抜き、呪文の様なものを唱えると、部長の体をふわりと浮かせた。

「・・・・・・・・」

俺とベルフェゴールがその家上がったのは、家主が完全に俺達のことを無視して部長を運んで家に入ってしまったからだった。

「おいおい、よもや聞こえていないのではあるまいな？」

「・・・え、あ、はい。」

放心状態だった俺は何にも聞こえてなかったのだが、正直に答えても怒るだろうから嘘を言った。

「・・・」

「・・・」

「やっぱり聞こえてなかっただろ？」

「・・・すみません」

今度から嘘はつかないようにしよう。

「んゝ何話してたんだっけ。あ、そうそう君と弟子との関係だ。弟子は確かセラティエルに仕官したとか話してたが、君も関係者かい？」

「えーと、俺魔物ハンターなんですよ。せんば・・・ローグさんと一緒に。」

俺は証明書をポケットから出して見せた。

「むむむ、なるほど。それで何があっただんだい？弟子の腕を取るつてのは普通の魔物じゃあないね。まさかまさか、『五つの座』とかだったかしちゃう？」

「なんですか、それ？」

家主の男は俺の返答に眉をひそめた。

「・・・君狩人だよな？もしかして知らない？ん、知らないの？」

今までの会話の流れから、この人物が使用人ではなく部長の師匠であることはおそらく間違いないが、一々勘に触る言い方である。

「何分、実力に知識が追いついていないといえますか、実戦ばかりだったんで。」

男は俺の大風呂敷に不快な顔をするかと思いきや、「それはいけないね」と真面目な顔で言っつて背後の本棚から一冊の本を抜き出してテーブルに置いた。

「読んでみたまえ。魔物に関しての記述が詳しく載っている。」

「あゝすいません、俺文盲でして・・・」

「おいおい良くそれで専属ハンターになれたな・・・」

情けないが、こればかりはどうしようもない。

「仕方ない、その記述を読んであげよう。」

男が喋ろうと口を開いたとき、室内にベルフェゴールが入ってきた。

「ローグさんは落ち着いたようです。今ベットで寝ています。」

喋るタイミングを失った男は開いた口から代わりにため息をついた。

「自家製の鎮静剤が効いたんだろう、とりあえず安心だ。あ、そういえば二人の名前をまだ聞いてなかったね、良ければ教えてもらえるかな？」

「イワキリ・ツトムと言います。」

「ベルフェゴールです。お二人の狩のお手伝いをさせていただいています。」

男は咳払いをした後、自己紹介した。

「名はギドー。元セラティエル国魔法研究部門責任者にして、この砂漠の住人。世間に見限られた隠者さ。」

そう言っただけで笑う彼の顔は蝋燭に照らされていて、最初の印象よりずっと老けて見えた。

時を同じくして、ベラドンナもまた自分の判断の甘さに自嘲気味に笑っていた。

「やっぱ、やめといった方が良かったわね」

今彼女を支配する感情は恐怖でも焦燥でもない。やるせなさである。

前方には馬鹿っぽい顔をした兵隊崩れの男が3人、ベラドンナとソテツを見てにやにやしていた。

無論彼女は知る由もないが、この3人はセラティエルでベルフェゴールにからみ、イワキリの登場で尻尾を巻いて逃げ出した男達であ

った。

「お嬢さん方、夜はここら辺は治安が悪いですが、明けるまで家に寄ってきませんか？」

「勿論俺達やお嬢さん方には何もいりませんぜ・・・たぶんね。」  
下品に笑う男達。隣を見ると早くもソテツがワイヤーを抜きかけていた。

「ここは私に任せなさい。」

ベラドンナが小声で耳打ちする。

そして男達を見据えた。

ソテツのワイヤーなら確実に始末できるが、それでは足りない。  
軽く見られたツケはそんな軽いものだ。

「すいませんが、そこを通していただけませんか？私達急いでいる  
ものですから。」

「だあかあらあ、ここらへんは危ないから俺達の言うとおりにしろ  
ってーの」

リーダー格の男がベラドンナの肩に手をかけた。

彼女はその男に、優しく微笑む。

「喧嘩は、相手を見てから売ることね。」

「・・・え？」

男は異変に気づくのに多少の時間を要した。

程なくして、彼の顔は苦悶に歪んだ。

「あーすつきりした」

晴れやかな笑顔とともに吐き出されるセリフ。彼女の周りには男達の死体が転がっている。

全員、苦しみに顔が捻じ曲がってしまっている。

しかし、男達の体には一切の外傷が無かった。

男達の死因は窒息死だった。

そんな顔を眺めながら、ベラドンナは明るく笑う。

彼女自身も気づいてないが、深層心理のレベルで彼女はイワキリに



逃げられた鬱憤を晴らしたいと思っていたのだ。

そしてその笑顔のままソテツに問いかける。

「こんな社会の害悪でも、体は一人前にたんぱく質で構成されているのよね。こういう奴らって、魔物とか肉食獣に早いとこ食われちゃえばいいと常々思うんだけど、どう思う？ソテツちゃん。」

問いかけられた赤い少女は無表情のまま小首をかしげる。

分らない、というジェスチャーである。

ほんとに、この子が喋る所を見てみたい。

ベラドンナだけではなく、誰もこの赤い少女と話したことが無かった。

それ以前に、この少女の声を聞いたものすらいなかった。

「・・・ま、いいわ。早く行きましょ。」

ベラドンナは黒いカクテルドレスの埃を払うと、ソテツを促した。

「む？ここは・・・？」

目を覚ますと、汚れがこびり付いた天井が見えた。

上半身を起こすと、自分がベッドに入っていることが分かった。

そこは自分がよく見知った部屋だった。

「師匠の家・・・か・・・」

そこまで考えると、睡眠から覚めた脳が本格的に始動し始めたのか、家の玄関で苦痛のあまり倒れたことを思い出す。

「ベットに寝かされていた・・・あの時と同じシチュエーションだな。」

また、あの軽薄そうで実際は真面目な男に借りを作ってしまったか。外を見ると、月に煌々と照らされた砂漠の風景が目に入る。

時折風が吹き、空中を舞う砂が地に複雑な陰影を形作っていた。

ふと、今何時か気に掛かった。

左腕を斬られた今、腕時計は手元に無い。

そして部屋にも時計が無かった。

「ここで、義務教育の成果を発揮させてもらうかな。」

私は再度月を見た。

三日月で地平線近く。方角は西だから、大体今は6時頃かな。

……あ。

ここは異世界だから月の出の時間は日によってばらばらなんだつた。と言うわけで時間は分からない。

「ふふふ……はははは。」

もうこの世界に何ヶ月もいるのに、忘れていたとは情けない。まったくもって情けない。

結局強がっていても、年相応に抜けているということだ。

そんな自分がたまらなく可笑しかった。

私はひとしきり笑った後、自分の左腕が妙に重いことに気づいた。

「……？」

私はもう消失しているはずの左腕を布団から引き抜いた。

「……ほう、これは……」

肘から先には義手が取り付けられていた。

メタリックな質感。左腕だけアニメのサイボーグみたいな感じだ。

試しに指を曲げ伸ばしてみようか。

「しゃきんしゃきん、とな……。ふむ、いい感度だ。」

生身の右腕と同じように、その義手は滑らかに、ごくごく自然に動いた。

「どれくらいの力が出るかな？」

隣の机に食事が置かれていたので、お盆の上のリングを持ち、力をこめてみた。

「ぐしゃり……とね。」

リングは私の手の中でバラバラになり、床に転がった。

申し分ない義手だが……

「この義手で、剣道出来るかな……？」

まだ帰れるかどうかすら分からないのに、私は一人、そんな事を考

えていた。

## 第十四話

「やっとなつたわね」

タグリヌス国裏街道の一角。刑務所のような近寄りたさが滲み出る一軒家を、ベラドンナとソテツは見上げていた。

入り口のドアに提げられている看板だけが、そこが酒場である事を示している。

バー「盗人の昼寝」

タグリヌス国で城の次に大きいこの建造物は、盗賊団「ブルー・ワイルドエンジェル」の隠れ家である。

ベラドンナは五大大陸に散らばる団員を召集する時、ここを使っていた。

「ここに来るのも久しぶりね。ずーっと飛行船乗ってたし。」

彼女は故郷の家に帰ってきたような軽い足取りで中へと入っていた。

「盗人の昼寝」はマスターが神経質なためいつもピカピカということとで有名で、他の国に負けていない唯一の飲食店だった。

無論客層はひどいが。

二人は酔っ払いに絡まれないよう視線を固定しながら、カウンターへと近づいた。

「こんばんは、マスター」

マスターと呼ばれた老いた小男は、二人をじろりと睨んだ。

「ここは子供のくるところじゃねえ。けえってくんない！」

「『緑髪小悪魔が呼んでるぞ』」

酒場のマスターは、ベラドンナの不可解なセリフに何と答えるわけでもなく、他の店員に「しばらく抜けるぞ」と言つと、背後の酒蔵への階段を上っていった。

二人も後に続く。

かなり上まで続いている螺旋階段の途中でマスターは立ち止まり、

壁の燭台の一つを思いつきり捻った。

まるでそれがドアノブであるかのように。

するとレンガの壁が二つに割れ、奥へと続く通路が表れた。

行き止まりのドアが燭台の明かりに照らされて、黒くぼんやりと光っている。

「お久しぶりです、ベラドンナ様。お会いできる日を心待ちにしておりました。」

マスターがそれまでの態度とは打って変わって、深々と頭を下げた。「そんな大げさな、2年ぶりぐらいでしょ。」

「明日とも知れぬ寿命の私にとっては、一日千秋の思いでした。」心の底から嬉しそうに笑う彼の笑顔は、盗賊団のメンバーしか見ることが出来ない。

「ソテツも、久しぶりだな。調子はどうだ？」

呼びかけられた少女は、親指を上に向けてビシッと腕を伸ばした。

「ははは、そいつあ良かった。」

「マスター、皆は来てる？」

「ええ。暗殺グループのメンバー全員が奥の部屋でベラドンナ様を待っております。もつとも・・・」彼はニガイ顔で続けた。

「酒盛りを始めておるかもしれませんが・・・」

「ふふふ、皆リラックスしてくれてるのね。」

奥の通路へと足を踏み入れながら、彼女は楽しそうに言った。

「おう、弟子。気分はどうだ？」

私は居間へと入った途端、師匠に声を掛けられた。

「・・・悪くは、ありません。食事もちやんと取れましたから。」

私は視線を合わせられない。

命の恩人にして魔法の師匠であるこの人に、また助けてもらってし

まっただのだ。

面目ないというか、自分の無力さをまざまざと見せつけられたような、胃がむかつく気分。

剣道の試合に負けたときでも、ここまで悔しいと思ったことは無かった。

「ほんとに、すみません。義手まで作ってもらって・・・」

「んゝまあ大変だったけど、可愛い弟子のためだ。私も一肌脱がせて貰ったよ。」

朗らかに笑う師匠。しかしベルフェゴールとイワキリは困ったように顔を見合わせている。

仕草や表情から、私の負の感情に気づいたのだろう。

「・・・おいローグ!!」

「は、はい。なんですか?」

普段師匠は私のことを「弟子」と呼ぶ。名前（と言っても偽名だが）で言う時は怒っているときだけだ。それも、かなり。

「てめえ命の恩人に対してその態度はなんだ。ああ?。感謝しろと言ってるわけじゃないがそんな暗い顔される覚えは無いぜ。」

一泊入れて、師匠は続ける。

「お前が何考えてんだか、俺には良く分かる。大方情けないとかそんな事考えてんだろ?別に

反省するのは悪くないがお前はただ、沈んでるだけだ。」

「そう、でしたね。すみません。腕を盗賊ごときに落とされたのが、悔しくて。」

「だったら強くなれ。一喜一憂している暇は無いぜ。」

客観的に聞けば、腕をなくした人間にこの激励は厳しすぎるだろう。現にイワキリとベルフェゴールは眉をひそめている。

しかし私には分かっていた。

「ええ、次は負けません。」

「そーだ、そのいきだぜ弟子。それに、人に頼ることは恥ずかしい

ことじゃあない。困ったとき助けてもらえるように、いつも人を助けりゃそれでいいのさ。」

叱責を糧に出来る。師匠は私のことをそう思っていて言ってくれているのだらう。

会話する相手によって最適な話し方を選択する。それが師匠のスタイルだった。

到底私には、真似できない。感情が雰囲気に出てしまっていてさえいる私には。

精進しなければならぬ。

私は新しくなった左腕で頭をかきながら「分かりました。」と明るく言った。

「はやくこねーかな」

誰ともなしに呟かれる声。

「盗人の昼寝」秘密の宴会室には中央にテーブルが置かれ、5人の男女が談笑しあっていた。

長い銀髪とあごひげをなびかせている翁。

窓枠に腰掛けている血色の悪い少年。

目元まで包帯をぐるぐるに巻いている男。

髪飾り、ドレス、ネックレスと全てが髑髏模様の麗人。

目深に紫のシルクハットを被った巨漢。

盗賊団の暗殺グループ「ダイスの目」の構成員である。

「ソテツはベラドンナ様と一緒に来るんだっけ？」

少年が翁に聞いた。

「そうじゃ。あの娘も、少しは話すようになったかのう・・・？」

「そりゃ無理だ爺様。ってか、あいつ喋れないんじゃないかな。あいつの声聞いたことある？」

「それは、ないな。」

「だろ？喋ってくれたらいい線いつてるんだけどな」

「・・・・は？何がいい線行っておるんじゃ？」

「あいつ顔は地味だけど悪くないし、あのショートカットがすごい似合ってるんだよね。ふふふ。会えるの楽しみだな」

「私は、ベラドンナ様の方が良いと思うけどね・・・」

イヤリングをいじりながら、美女がポツリと言った。

マントの少年が、ムキになって突っかった。

「例えば？具体的な説明を要求する！」

「例えばって、全部よ。」

「あら、それは嬉しいわね」

部屋の中の誰のものでもない、よく通る声が返答した。

美女が振り返った。

ドアに触れることなく部屋に入れる人物。

その容姿とカリスマ性で、10代にして盗賊団をまとめ上げる天才。

ベラドンナが、壁に寄りかかって微笑んでいた。



## 第十五話

「ベラドンナ様！」

「皆集まってくれたわね。」

答えるのとはほぼ同時に、ソテツがドアを開けて入ってきた。

ベラドンナと「ダイスの目」。

盗賊団旗揚げ時のメンバーが、一堂に会した。

「ベラドンナ様、今回の仕事は・・・？」

ベラドンナを除くその場にいた全員が抱いていた疑問を、銀髪の老人が口にした。

盗賊団直属の暗殺グループ。

タグリヌス国の諸侯を震撼させたこのチームは、他の四力国が都市伝説ではないかと疑うほど、その存在が隠されてきた。

よって構成員が二人以上同じ任務につくことは珍しく、ましてや全員集まることなど皆無だった。

これが意味するのは、この任務が総力を尽くさなければ遂行できない困難な物だということだ。

「今回のターゲットは・・・」

ベラドンナが大きく手を広げ目を閉じた。

すると彼女の影が大きく揺らぎ、まるで実体を持っているかのようにゆっくりと立ち上がった。

影の柱はしばらく波打っていたが、やがて3体の人型を形作った。

イワキリ、ベルフェゴール、鬼怒川の3人の姿である。

産毛から爪の先まで、黒一色でなければ見分けがつかないくらい精巧であった。

ベラドンナの「異能」

それは影を操る術である。

能力の及ぶ範囲内であれば、そっくりの人型を作り出すことから大人三人を一度に絞め殺すことまで、ほぼ自在に操作できた。

「虐殺墮天使、ですか。して他の者達は……？」

「セラティエル直属のハンター。魔物の巣窟を攻略するのを手伝わそうと思ったら拒否してしかも飛行船まで見られちゃったから、消さなくちゃいけないと思ってね。」

「随分と若いですね。」

「ってか3人ともガキじゃん。虐殺墮天使はまだいいにしても、セラティエル国って意外と人材不足なんだな。」

青白い少年が、自分も他人をガキと呼べるような歳ではないことを棚に上げて言った。

「ペヨーテ！口を挟むな。」

「へーへ。分かりましたよ爺様。」

仕切り直し、と言わんばかりに咳払いをして老人は続けた。

「しかしベラドンナ様。セラティエル国専属ともなれば、殺せば向こうも黙ってはおりますまい。このご命令はいかなものかと……」

「

「なに言っただじじい。だから俺らが『気づかれないように』殺すんだろ？。死因を偽装するなんて、そんなの簡単だろ？」

包帯を巻いた男が、自分の足に乗った刀を撫でながら言った。

「……む、確かに。今のは失言であつたな。申し訳ありません、ベラドンナ様。」

「気にしないで。それに万が一、ブルーワイルドエンジェルの仕業だと分かっててもあの国の弱みは握っているから、クレイムルに交渉を任せれば大丈夫よ。」

「……分かりました。この3人を見つけ出して殺せば良いのですね？」

「そ。あんまり認めたくないけど、こいつら結構強いからがんばってね。」

自分の主が強いと言うからには相当な実力を持っているのだろう。

全員がかつてない難易度の任務に身も心も緊張させた……約一名を除いて。

「ベラドンナ様、俺はこの任務受けらんねえ。」

青白い少年が頬をかきながら言った。

そしてベラドンナが口を開く前に、彼の耳すれすれのところにフォークが突き刺さった。

彼女がやったのではない。包帯男が投げたのだ。

「ペヨーテよお、おめー何様のつもりだ？主の命令には絶対服従だろうがボケエ！」

顔の下半分しか露出していないにも関わらず、その表情からは凄まじい怒りがほとばしっているのが分かる。

しかし少年、ペヨーテは慌てず騒がず、こうなることを予測していたように落ち着いた口調で言った。

「主の命令が大切なことは俺だつて分かっている。だが俺には『女を殺さない』という信念がある。信念を無くしたら人は人でなくなる。だから俺は受けられないと言ったんだ。」

「それが分かってないってことなんだよ！そんな信念なんて捨てる！」

その言葉がペヨーテに届いた途端、彼の雰囲気から柔和なものが消し飛んだ。

「お前ちよつと血の気が多いんじゃないかコブラ？一度『枯れて』みなよ。」

そう言つて腰掛けていた窓から、外へと右手を伸ばした途端、闇夜を無数の羽音が埋め尽くした。

鳥でも虫でもない。

彼の右手に集まってきたのは『吸血コウモリ』だった。

包帯男・コブラはその様子を「耳」で感じ取り、足元に置いてある刀を抜いた。

室内灯に照らされた刀身は純白で、あたかも鮮血で染められるのを待ち望んでいるかのようにだった。

「その小汚ねえペットちゃん達に、お前の血を吸わせたら喜ぶんじゃないのか？」

ペヨーテは答えない。

双方ともに裂帛の気合をもって、相手を威圧していた。

その緊張感が体を突き動かす寸前、ベラドンナが割って入った。

「ほらほら、二人とも喧嘩しないの。」

その雰囲気は到底喧嘩と呼べるようなレベルではなかったが、二人にはその一言で十分だった。

ペヨーテはコウモリを闇夜へと解き放ち、コブラは刀を鞘に納めた。

「失礼しました、ベラドンナ様」

同時に発せられる声。

「ペヨーテ、あなたの信念に反すると言うのなら、男二人だけでもいいわ。任務、受けてくれないかしら。」

「分かりました。」

ペヨーテはおとなしく引き下がった。

「さて、皆早速取り掛かって頂戴、と言いたいところだけど、ソテツから皆にお土産があるわよ。」

声も発さない無愛想な娘がお土産？

全員が興味津々といった様子で彼女を見つめた。

視線の浴びたソテツは、無造作に上着の内ポケットから『左腕』を机に投げ出した。

「・・・・・・」

いくら人の死を見慣れている人間でも、いきなり仲間から土産だと言って腕を出されたら反応に困ってもおかしくないだろう。

「ソテツ・・・それは誰の腕だ？」

一番最初に硬化から解けたシルクハットの男が、返事をもらえないことも忘れて言った。

当然彼女は答えない。

しかしその代わりに、投げ出された左腕の手首を皆に見えるように掲げた。

「・・・あ、その機械は・・・!」

左腕には腕時計が巻かれていた。

レバー・レンスにはないその便利な道具。そして下級盗賊達に恐れられている人物の象徴。

「それ・・・虐殺堕天使の腕か・・・!?!」

こくこくとうなずくソテツ。

「お前が・・・やったのか?」

同意の仕草を示す彼女。

「すごい・・・すごいぞ!これはすごい。」

シルクハットの男は腕を抱えると、頬ずりせんばかりにそれを撫で回した。

「素晴らしい・・・腕だけなのに強力な魔力が感じられる。これを『材料』とすれば最高の人形ができるぞ!」

「お土産」に感動して狂喜乱舞している男以外は、皆全く同じ感情を抱いていた。

「なかなかやるじゃない。ソテツ。」

「そうだな・・・俺もがんばんなきゃ。」

「喧嘩なんかしてる場合じゃねーな。」

「わしも負けておれんわい。」

腕のお土産。それはシルクハットの男の材料として使われるだけではなく、しばらく顔を合わせることもなかったメンバーを、「負けれない」という感情でつながり合わせるのに一役買ったのだった。そしてベラドンナが高らかに言った。

「さあ、宴を始めましょう。鮮やかで美しく、そしてとびつきり『血なまぐさい』宴をね!」

「準備はいいか?イワキ君」

「あい大丈夫です。」

先輩の左腕が代わってから3日目。部長が全快したので俺達3人はギドー氏の家を後にすることにした。

「おい弟子、『あれ』いるだろ？玄関に運んでおいてくれないか？」

「『あれ』・・・ああ、はい。分かりました。」

「後ベルフェゴール君はどこにいるか分かるか？」

「へ？部屋で荷造りしていると思いますけど。」

「分かった。」

部長が玄関の方に消えたのを確認してから、ギドー氏が小声で言った。

「・・・さて、イワキリ君。ちょっと来てくれか。」

そして家の裏手、倉庫の方へ歩いていった。

俺はそんなギドー氏に内心で首を傾げた。

部長に言えない何か、か？・・・

あの師弟関係からしてそれは無さそうだが・・・  
考えながら俺も後に続く。

倉庫の入り口で、ギドー氏は振り返った。

「君に言いたいことがある。他でもない弟子のことなんだが・・・」

「ローグさんがどうかしたんですか？」

「彼、少し二重人格っぽいところがあるんだが、気づいているかい？」

「えーっと・・・」

表面的には、部長と俺とはあくまで仕事上のパートナーでしかない。となると「知らない」と答えるのが自然なのかもしれない。

しかし相手はあの部長の師匠だ。すぐに見破られそうな気がする。  
ここは正直に答えるべきだろうか・・・？

「・・・まあ、心当たりは・・・」

「だろ？まあ人間というのは多かれ少なかれ二面性を持っているものだが、彼の場合はそれだけじゃ片付けられないんだ。」

一息ついて、ギドー氏は続ける。

「魔法を教えているときに気づいたんだが、戦闘中みたいな常とは違う心理状態のとき、彼の魔力が飛躍的に上がる時があるんだ。」

「・・・え？俺魔法のことって良く知らないですけど、それって普通じゃないですか？『火事場の馬鹿力』的なものが働くんじゃない？」

「

ギドー氏はため息をつかんばかりに呆れた顔をした。

「・・・君、アンドラス国の脳筋馬鹿みたいなこと言うね・・・」

「の、脳筋・・・」

「ま、いいや。あのね、魔法の原動力となる精神力っていうのは状況や環境で大きく変化すると思われているけど、違うんだ。本当は肉体以上に融通が利かないものでね、常に鍛錬を怠らず徐々に力を上げていくしかないんだ。そのかわり、肉体のようにトレーニングを持続しなくても衰えたりはしない。が、弟子の場合は精神力の上限が激しく変動するんだよ。こんなことは普通有り得ない。」

「・・・だから『違う人格を持っている』とでも考えないと説明がつかない。ってことですか？」

「私のセラティエル国での経験と独自の研究の成果を照らし合わせて、それしかない。」

「分かりました。でも、それと俺と、どういう関係があるんですか？」

「君と弟子はただの仕事上の仲間、というわけではないだろう？友人とか、深い関係であるはずだ。」

俺は息を呑んだ。この男の洞察力はあの部長をも超えているだろう。  
「・・・なんで分かったんです？」

「決定的だったのは彼がここに君達を連れてきたことかな。あいつは自分が信用している相手以外は自分との間に『壁』を作って接するから、もし君たちが浅い関係なら、まずセラティエル国に連絡とって後続の魔導師を頼んで君との関係を絶ってから、ここに来ただろうな。そういうわけで弟子の面倒をよろしく頼む。特に二重人格のところとか、ね。彼は強いようで意外と・・・弱い。」

俺にとっての部長は完璧主義な畏怖すべき人物でしかなかったが、よくよく考えれば俺達は剣道部と文芸愛好会を掛け持ちしていたから、顔を合わせる機会が多かった。

部長が俺のことを『信頼できる』と思ってくれているのなら、それに応えない道理はない。

「やれる限りやってみます。」

「頼むぞ。」

そう言うギドー氏は、まるで面倒見の良い父親のようだった。



## 第十六話

・五つの座の伝説・

かつて「レバーレンス」は一つの大陸として存在し、レバーレンス王家が支配していた。

絶大な権力の元、戦は起きず、庶民は平和な生活を享受していた。しかしレバーレンス暦113年、転機が訪れる。

7代目レオナル・レバーレンスの子供である5人の兄弟が王位継承の座を奪いあったのだ。

長男は言う。

「年上である私が、世界の民を正しき方向へと導くに足る。」

次男は言う。

「英知に長けた私が、世界の民に更なる繁栄をもたらすに足る。」

三男は言う。

「全てにおいて偽らない私が、世界の民の信仰心を養うに足る。」

四男は言う。

「勇猛たる私が、世界の民の安寧を守るに足る。」

五男は言う。

「何も語るまい。凡人たる私の兄弟と比べれば、王は私をおいて他にいない。」

王族、諸侯は五つに割れ、王座を巡って戦いの日々を送るようになった。

世は乱れに乱れ、荒廃の一途を辿った。

神はこの様子を嘆き、五人の兄弟に呪いをかけ、人間であることをやめさせたのであった。

神は言う。

「団結を知らぬ人間が、人の世を治めるには足らぬ。」

後には旗頭を無くした配下が残され、戦は自然消滅。話し合いの結果、国は五つに分断されることとなった。

「皆、忠誠を私に誓うと言ったではないか！」

やがて魔物となつた兄弟を退治するお触れが、各国で出された。

その怨念は大陸を五つに割り、その怨恨は民に災厄をもたらし、その執念は魔物となった兄弟達に超常の力を与えた。

-----

-----

-----

-----

—  
—  
—

「あくまで伝説だ。だが各国に魔物の首領がいるというのはほぼ間違いないみたいだな。」

「そうなるな」

「馬鹿言ってんじゃねえぞイワキリ！俺らはこいつらブチ殺さない」

「  
・  
・  
・  
・  
すみません。」

どうやら自分の世界に没頭すると周りが見えなくなるタイプらしい。

直怖い。

俺達はとりあえずセラティエル国に戻ろうと、タグリヌス国の港「ネレイド」に向かうため、延々と続く砂漠を歩いていった。

「先輩・・・本当に無理なんですか？」

砂漠は熱されやすく冷めやすい。

俺は額に滴る汗を拳で拭った。

「何度も言わせなくてくれ。私の飛行術は3人一度に飛ばすことは出来ない。せいぜいパラシュートみたいにゆっくり下降するぐらいだ。それに師匠の『結界』がある以上徒歩の方が安全だ。」

ギドー氏は「研究を邪魔されないように」という理由で広大な砂漠に魔法をかけ、砂漠を歩く者が『見られたくない』と願う限り発見されないようになっていた。

虐殺墮天使と呼ばれた先輩が、今まで盗賊に見つからなかったのはここに理由があるらしい。

「うーそうですか。」

安全も何も現在進行形で水なくて死にそうだけどね。

よし、ここは気を紛らわせることにしよう。

「先輩、タグリヌスには悪名高き盗賊はたくさんいますけど、魔物はどうなんです？」

「まったく見ない。私が倒したのもセラティエル国でだしな。」

「ほんとですか!？」

「治安が悪いことも災いしてか『魔物も寄らぬタグリヌス』と言われているみたいだ。」

それは・・・いや、変だ。

レリウーリアは「五匹魔物を倒せ」と言ったわけではない。「5つの大国に潜む魔物を倒し」だ。だから最低一匹はいないとおかしい。まあもつと厳密に言ってしまうえば「五つの座」が倒すべき魔物ではない、という可能性もあるがそこは深く考えないようにしよう。考えても無駄だ。

「さて、今度は盗賊団どもについて私の知っている情報を教えてあ

げよう。いずれ戦うことになるしな。」

「え？本当ですか？」

ベルフェゴールが顔を上げる。この子は聞いてないようでちゃんと聞いているらしい。

「私はてつきり、イワキさんを放っておくものだと思っていましたが・・・」

俺と同じ意見を言うベルフェゴール。

ブルーワイルドエンジェルもそんなに暇じゃないはずだ。ベラドンナの目的が魔物の巣窟荒らしであるなら、マシユイト国にでも行って狩人を引っこ抜いてくりゃいい。

そんな俺らに対し、いやいやいやと苦笑する部長。

「理屈で言えばそうなる、が、あの女は理屈で動いていないんだよ。いわゆる物欲の権化と言う奴かな。自分の持ち物を大切に、欲しいと思つたものは自分の物にするかこの世から抹消するか、といった感じだ。実際ベラドンナの私物を盗もうとしたり、盗賊団から抜けようとして死んだ人間が何人もいる。」

それにだ、と部長は人差し指を立てる。

「あいつは夢で啓示を受けたそうだな。だから余計私達の存在が大切に思えるのだろう。殺す動機を確固たるものにするにはこれ十分だ。」

「・・・なんか、怖いですね。」

この暑いのにブルツと震えるベルフェゴール。流れるような黒髪が風にたなびく。

そんな姿がたまらなく可愛く、思わず抱きしめてしまいたくなる。

「さて、そこで重要なのが盗賊団専属の『ダイスの目』と呼ばれる暗殺部隊の存在だ。私達の戦闘力に匹敵するのはそいつらとベラドンナぐらいしかない。後は何人集まっても同じ雑魚だ。」

「暗殺部隊ですか・・・」

伝説の魔物に殺人集団、全く泣きなくなってくる。

「メンバーは6名。能力は私も知らないが、おそらくタイマンに真

価を発揮するかこつそり殺すのに適しているかのどちらかだろう。そうじゃなきゃ魔物の巣窟襲っているはずだからな。」

「どこにあるのか分かってないから襲ってないだけ、とは限りませんか？」

「有り得なくはないが・・・ベラドンナは君に『魔物を狩れ』と言ったんだろう？普通場所が分からなければ探せと言うと思うんだ。だから私は場所を大体把握していると考えた。」

部長の分析能力には全く頭が下がる。

「もう一つ分かることは、そのグループが『魔導師』『魔具使い』『妖術師』で構成されているということかな。」

何？それって全部違うの？

「と言ってもイワキ君は分からないだろうから、ちゃんと説明しておこう。」

そこで言葉を切ると、杖を出してぶつぶつ呟いた。

何が始まるのかと期待していたら、部長は魔法で水を出して喉を潤しただけだった。

「・・・先輩水出せるんですか」

「そりゃそうさ、そうじゃなきゃこんな砂漠越えられるわけがない。」

「・・・あの、俺にも」

「いよいよヤバくなったらちゃんと飲ませてあげるよ。それまで我慢だ。」

鬼だねこの人。

「ベルフェゴールさんは飲む？」

ますます酷い。

「いえ、イワキさんが飲まないんだったら私も我慢します。」

再び本の世界に入っていたベルフェゴールは顔を伏せたまま返事した。

よく言った、それでこそ俺のベルフェゴール！

・・・ただ単に本読むの邪魔されなくなかっただけかもしれないけ

ど。

「む・・・そうか。」

結局飲んだのは一人だけだった、という気まずさからか、部長はわざとらしい咳払いをして話を続けた。

「まず魔導師。これは私や師匠を想像してもらえれば分かりやすいだろう。精神力を鍛えて4大元素を操る術者だ。色々組み合わせることによってバリエーションが増えるが、魔力が尽きたら自然回復するのを待たなければならぬからあまり持久力がない。4つの元素全てを使いこなすのも難しい。」

「次に魔具使い。彼らは魔導師のような修行をすることなく、魔法の掛かった道具『魔具』を用いて超常の力を振るう。彼ら自身の精神力は関係ないから魔導師と違って能力が持続するのが最大の特徴だが、その代わりレパートリーに欠け、一度ネタがバレれば確実に対策が練られてしまう弱みがある。あ、あと魔具と呼ばれるものは大体意思を持つから、道具に選ばなければならないな。」

「最後に妖術師。生まれつき4大元素に縛られないような超能力を持った人間だ。おそらく魔導師と同じで精神力を消費するのだろうが、正直こいつらに関しては良く分からない。あまりに数が少ないからな。」

なるほどなるほど。

要するに・・・めんどくさい相手だということだ。そういう奴らと戦うぐらいならどう考えてもベラドンナに協力する方が簡単である。思わずため息をついてしまう俺。英雄らしい行動を取らなければならないという制約が無く、ベルフェゴールが止めていなければ正直そっちを選んでいただろう。

まあ今から考えても遅い・・・か。盗賊団は俺らを殺そうとしている。もう後には引けない。

待てよ、そういえば・・・

「先輩、砂漠の上に港があるんですか？」

「いや、砂漠の終わりから5分くらい歩いたところにあるが。」

「・・・え、じゃあギドーさんの魔法、効かないじゃないですか」「うむ、効かないな。」

効かないって先輩・・・

港といえば人がたくさんいるに決まっている。

そんなところを突っ切るのは見つかってくださいと言ってるようなものだ。

それは無謀を通り越して自殺行為。

ベルフェゴールも怪訝な顔をして部長の顔を見つめている。

「先輩、・・・それは無茶ですよ。向こうは俺達の事血眼で捜してるんですよ!？」

「いや、あの港に限っては大丈夫。盗賊団もあそこを利用するとは思わないさ。」

自信ありげな部長の顔。

俺は考えてみた。

「あの港に限って」他の港だと駄目。それはつまり船舶による渡航自体が安全、というわけではないということだ。

次に浮上してくるのは先輩、あるいはセラティエル国の息のかかった港である可能性。しかしこれは「盗賊団もあそこを利用するとは思わないさ。」と矛盾しているから駄目。盗賊団は真っ先にそういった港に目を付けるはずだ。

となると・・・

「・・・そんな難しい顔して考えなくても、聞けば理由くらい教えるよ?」

俺の様子を見かねた部長が声をかけてくる。

・・・む、なんか負けたみたいで悔しいな。

しかし好奇心が勝った。

「教えてください。」

「さつき『タグリヌスでは魔物を見ない』と言ったが、実は予想はついているんだ。レリウーリアの言葉をよくよく考えたら、分かったんだよ。居所がね。」

5つの国に潜む・・・

「・・・そう、か。国にいても大陸にはいない、つまり魔物は海か空に・・・」

「その通りだ。後者の空は探索済みだから残るは海しかない。というわけで調べてみたら、興味深い情報が入手出来た。」

漁師から聞いた話しただけだね、と部長は続ける。

「ネレイド港はタグリヌス国の全盛期、だから今から100年くらい前かな、その時期に出来た港で当時は活気があったらしいんだが、ある時を境にネレイドから出航した船が目的地に着かず行方不明になるようになった。漁船も貿易船も、事件を調査させるために派遣した軍艦も一つ残らず、だ。それ以来ネレイド港とその近く一帯の海には誰も近づかなくなっただよ。だから私はそこが怪しいと思っっているんだ。」

なるほど。だから盗賊達も俺達が使うとは思わない・・・ということか？

「・・・裏の裏まで考えて、その港で待ち伏せしているかもしれないよ？」

「万一、イワキリ君の言う通りだったとしても向こうは邪魔しないだろう。なぜならあいつらの目的は、あくまで俺達を『この世から消す』ということだからだ。『自分の手で殺すこと』じゃあない。

つまり向こうにしてみれば俺達がネレイド港から出航して勝手に死んでくれればそれでOKなんだよ。セラティエルとの関係を悪化させずに私達を消せればそれに越したことはないからね。対して私達はいつかは魔物を殺さなくちゃいけないからネレイド一帯の海を探さなくちゃいけない。」

最も船消滅の事件が、魔物の仕業ではないという可能性もあるけどね。

そう言っただけ部長は話を締めくくった。

「・・・頭いいですね、ローグさん」

さっきから聞いてばかりだったベルフェゴールが口を開いた。



毒物百科はもうカバンの中にしまわれている。

もう読んじゃったのだろうか？まさかね。

「既に存在する条件を考察しただけさ。港にしても魔物にしても、私の力で何か状況を変えたわけではない。」

その考察が常人にはできないんだけどね・・・

「・・・と、おしゃべりしている間に港の近くまで来たようだな。」

言われて視線を上げた。

地平線付近に海が見える。

その周辺には石造りの建造物が立ち並び、太陽の光を受けて白っぽく光っていた。

雑誌に載っていそうな、美しい風景。

だが俺にはその美しさがどこか薄っぺらく見えた。

例えるなら、中身の無い剥製。

俺の「視力」は目に映る全ての建物が、人の住んでいない廃墟であることを知らせてくれた。

美しいのに、不自然。亡骸のようなその姿からは負の瘴気が感じられる。

ここ、夜は怖そうだな・・・

俺は珍しく、実体を伴わない漠然とした恐怖を感じた。

## 第十七話

「ほんとに来るんですかね」

ふーっ、と煙草をふかす青年に、中年一歩手前といった男が腕組みしながら答える。

「さあな、まあ来てもおかしくないと思うが・・・」

「俺・・・なんかこの街嫌いなんですよね」

「そうか？俺は煩わしい奴が一人もないから好感を持っているが・・・」

「煩わしいも何も人っ子一人いませんけどね」

「そんなことより、お前は どうして 変だと感じるんだ？」

「え？別に、そんな大したことじゃないですよ」

「いや、魔導師の勘は良く当たるからな。具体的に言ってくれないか？」

「・・・魔力、みたいなのが感ぜられない、こともないような・・・」

顎に手を当てながら曖昧に言う青年。

「他国で会った魔物の気配に、どことなく似てるんですよ」

「・・・ふむ、もしかすると噂ってのは本当かもな」

「噂ですか？」

「この港町の近くの海で船が消えるって話、聞いたことあるだろ？」

「あーありますね」

「あれが魔物の仕業じゃないか、っていう話だ」

「・・・海に棲む魔物っすか。今まで考えたことも無かったですけど、確かに有り得ますね。・・・って俺達危なくないですか？」

「港町から人がいなくなっただのは皆気味悪がつてだ。実際に被害が出たわけじゃない。だから大丈夫だろう」

普通そうだった廃墟群は犯罪の温床となるのだが、これ以上治安を悪化させたくないベラドンナの策で、「港町でも人が消える」とい

う流言がはやったため今ではチンピラも近寄らなくなっていた。

二人の男は廃墟の中でも一番しつかりしていた教会の二階、バルコニーから窓越しに街の出入り口を監視していた。

「にしても見張るだけって言うのもなんていうかなんていうか・・・」

・  
」

「俺だってそりゃ不満だよ。でもあの飛行船から逃げたっていうんだから俺達の手には負えないだろう」

「あんな小娘がいても、ですか？」

「もちろん俺達が、セラティエルから拉致した娘は大したことない。だが後の二人が・・・」

「・・・そうですよね。」

専属ハンターと虐殺墮天使。

特に後者のおかげで盗賊団の指揮に影響が出ていることを、それなりに高い地位にいる二人は知っていた。

退屈だなーと漏らす青年と無言の男。

二人が次に動いたのは大分経ってからだった

「誰か来たようだな・・・」

ポツリと呟かれる言葉を聞き、青年は寝転んでいた床から飛び起きた。

流れるような動作で傍らの杖を引き寄せる。

「奴らですか？」

「多分、そうだな。さて連絡連絡・・・」

男は懷から水晶玉を取り出した。

盗賊団の幹部クラスのみが持つことを許される魔具。

魔力をこめる事により、水晶玉同士をつなげ、周囲の映像、音声を伝達する。

主に連絡手段として使用されていた。

「おいレオナルド、これに魔力こめてくれ。」

はいはい分かりましたよーと返事がくるものと思っていた男は、シンと静まり返る教会を不審に思った。

そして周りを見渡す。

杖を握った青年の姿など影も形も無かった。

「あの馬鹿やるおおおおお！」

あれ程戦うと言われているのに、あいつは行ってしまった。

水晶玉を戻すと、壁に立てかけていた細身剣を引っつかみ、階段を使うのももどかしいとばかりに窓から飛び降りた。

「着いた。予想通り妨害はなかったな。」

「せ、先輩、水……」

「この前来たときはどっかに井戸があつたはずだ。」

「……は？」

「砂漠ならまだしも、もう着いたんだし、あんまり私も魔力を使いたくない。」

「……先輩これで俺が死んだら化けて出ますからね。」

「そんな大袈裟な。」

探してきます。と一声叫ぶとイワキリは走っていつてしまった。待つてくださいくと後を追いかけるベルフェゴール。

後二回頼んだら、出してあげたのに。

私も飛行術を使おうとして……やめておいた。

これで飛んでいるのをイワキリに見られたら、魔力うんぬんの話に差し障る。

私も走ることにした。

「軽装の旅人がこの街に来たら一番初めに何するか、ずばり水分補給だ。」

民家の一室、その窓から青年は井戸を見ていた。

距離にして15m。

そしてその井戸の中には毒薬が投げ込まれていた。

「熟睡している赤子のように安らかな死・・・正直ハンターなんて危険な仕事やって、こういう死に方が出来る人間は多くないぜ。」  
ビンの中の白い粉を揺らし、青年は不敵に笑った。

「・・・来た」

案の定、専属ハンターが井戸へと歩いてきている。他の二人の姿は見えない。

まとめて始末できないのは残念だが、一人だけでも十分な功績だろう。

「さあ飲めよ・・・そしてしっかり味わうんだぜ・・・」

つるべを手繰り寄せ、桶を手を持ち水を口に・・・含んだ。

そして苦しむことなく、ぱったりとその場に倒れてしまった。

「うふはははは。案外、大したことなかったな。簡単簡単。」

声を押し殺して笑う青年。

そのまま倒れているハンターに近づき、愛おしそうに耳打ちする。

「俺の出世の足がかりになってくれてありがとよ。」

「いや礼を言うのはこちらの方だ。」

「・・・はえ？」

青年は視界から入る情報を脳で処理するのに、多少の時間を要した。腕によりをかけて作った毒を飲んだハンターが、何事も無かったかのように立ち上がったのだ。

「なんてったって『案内』してもらえるんだからよ」

青年は立ち上がる動作、口を開く動きが全てスローモーションに見えた。

「ありえない・・・そんな、ありえない・・・」

もう自分が何を口走っているのかも分からない。

結局青年は、ハンターの当身が鳩尾に決まり、意識がブラックアウトするまでの間ろくに抵抗することも出来なかった。

「やっぱり毒、入ってたんですね。」

「ああ。死んだ振りっていうのも意外と難しいな。にしても良くこの距離で『匂い』が分かったな。」

イワキリは引きずっている男を一瞥する。

華奢な体つきと杖が、その男の職業を示していた。

井戸まであと10m、といったところでベルフェゴールが追いつき、「毒のおいがするから井戸の水を飲んではいけない」と言ってくれなければ命を落としていた。

「どこかで見たような・・・あ、私を飛行船にさらった男です!」

「ほんとか?ならこいつは盗賊団の一員ってことで間違いないな。」  
これが意味する事はなんだ?

部長の推測が間違っていた、ということだろうか、いや俺達を殺すつもりならこんな杜撰な計画であるはずが無い。よってこいつが「ダイスの目」とかいう暗殺グループの一員だとは考えづらい。

となると・・・構成員の一人が俺達を偶然見かけてあわよくば殺そうとした、といったところか・・・

「まあ詳しいことはこいつ自身に聞きゃいいよな。」

盗賊団や魔物の巣窟に関して、絞れるだけ絞ってやろう。

俺はこの時、「仲間がいるかもしれない」ということをすっかり失念していた。

## 第十八話

「つかまっちゃったよ〜どうするよ〜」

青年、レオナールはぐるぐる巻きに縛られた縄の中、頭の中でもぐるぐると独り言を繰り返した。

もう先ほどの恐慌状態からは回復している。

彼は天井を見上げた。

建物の感じから言っておそらくまだネレイドの近くだ。ギースさんは助けに来てくれるだろうか・・・いや、彼に頼ってばかりじゃ駄目だ。自分でなんとかしなければ・・・って言っても魔導師は杖ない又何にも出来ないんだよね・・・はあ、これなら毒なんて不確実な方法とらずにギースさんと戦っていれば・・・ってかそれ以前に戦わずに連絡だけしてれば良かったんだよね・・・

いつになっても答えの出でこない自問自答は、ドアを開ける音で中断された。

こげ茶色のロングヘアーに水色のワンピース。

宿屋からさらったベルフェゴールとかいうやつだ。

「十分休息はとれたかしら？」

「・・・休息。俺達盗賊団はこういう状態を『監禁』って呼んでいる。ボキヤブラリー少ないとこの先苦労するぜ？」

「もしかして自分の置かれてる状況が分かってない？」

「よぉーく分かってるぜ。盗賊団の秘密喋れと、あんたらはそう言いたい訳だ。」

「そういうこと。話して。あ、後嘘つこうとしてもすぐ分かるから。」

後半のセリフに若干疑問を覚えながらも、青年は答えた。

「口が堅くないと出世できない組織に所属してるものでね」

ふう、とため息をつき、レオナールを冷めた目でみるベルフェゴール。

数秒後、彼女はポケットから小瓶を取り出した。

「あのね、私もこんなことあんまりしたくないんだけど・・・いや、本当はすごくやりたいんだけどイメージが崩れちゃうから敢えてそう言うだけなんだけど・・・」

「なんだ、拷問にでもかけるってか？やってみなよ。」

せせら笑うレオナルだが、次のセリフを聞いて口を開けたまま固まってしまう。

「『導き手』って薬知ってる？」

「・・・は？」

レオナルは耳を疑った。

導き手。レバーレンスの後継者争いの大战時使われた自白剤である。正確さに著しく欠く拷問の代わりとして、初代セラティエル国王が自ら開発、使用された。

その強すぎる効力から、他国に漏れ無いよう誰にも調査方法が伝えられることなく、歴史の闇へと消えていったとされる伝説の薬である。

薬学に関して深く研究している者でもなければ知りえない名が、目の前の少女の口から出された。

それは彼を再び驚愕させるのに十分であった。

「これがその薬ではない・・・っていう保障はどこにもないわよね？」

「馬鹿な！有り得ない！この俺がどうしても作れなかった薬を、お前みたいながきが作れるわけがない！」

「うん。多分完璧じゃあないでしょうね。きっと不純物とかもいっぱい入ってるでしょうね。一度飲んだら廃人になっちゃうかもね。そしたらあなたの研究とか知識とか、誰にも知られること無くこの世から葬られちゃうわよね」

「はなせこのやるおおおお！」

「野郎？見ての通り私は女なんだけど。ボキヤブラリー少ないところの先苦労するわよ？」



第三者が見れば彫刻のように整っている、と感じるであろう天使の微笑を浮かべるベルフェゴール。しかしレオナールには悪魔の嘲笑にしか見えなかった。

「・・・分かったよ。負けだ。負けだよ。」

「分かってもらってうれしいわ。」

もうどうにでもなれ。

自暴自棄を顔中で表現しているレオナールは、やがて情報を話すために口を開いた。

「イワキリさんもローグさんも、ほんとにすごいです!」

「いやベルフェの演技の方がすごいと思うよ。」

「イワキリ君に同じ。私達はちよつとばかりこういうのに慣れてるだけさ。」

どの程度骨のある奴か分からない以上、最初から拷問にかけるのは得策ではない。何よりそれは英雄のすることではない。だから自白剤を飲ませると脅して情報を引き出すのはどうか。それがイワキリの見解。

イワキリ君に付け足しとして、魔導師は知識を重んずる傾向が強いから、痛めつける拷問より「廃人になる」と言って知識が失われると脅すと効果的ではないか。それが鬼怒川の意見。

「伝説の自白剤」がありますからその名を出しましょう。毒で私達を殺そうとしたぐらいだからきつと相手は知っています。というのがベルフェゴールの案。

こうして3人は相手を全く傷つけることなく、情報を引き出すことに成功したのであった。

「さて、と。あいつこの後どうします?」

「解放してやつても構わないだろう。イワキリ君を殺そうとしたのは独断みたいだったから追っ手が来るとも考えにくい。」

「私も賛成です。命を取ってしまうのは可哀想ですから。」  
やっぱり2人とも考え方が全然違うな、とイワキリは密かに苦笑した。

鬼怒川の考えは要約すれば「必要が無いから殺さない」。つまり必要があれば殺すと言っているのに等しい。

それに対しベルフェゴールは「殺したくないから殺さない」、感情を根拠としている。

この違いが今後の旅にどのように影響していくか、少し不安だといワキリは感じた。

しかしすぐに考えを改める。逆に言えばバランスが取れているというところかもしれない、と。

理性で判断する部長、感情で見るベルフェゴール、そしてニュートラルポジションで直感で進む俺。悪くないな。

イワキリの楽観的で前向きな考えが、吉と出るか凶とでるかはまだ誰も知らない。

時を同じくして、イワキリとは反対に超ネガティブになっている人間が一人。

「くっそ・・・いつそのこと見捨てちまうか・・・」

ギースは細身剣をいつでも抜けるよう注意を払いながら、相棒のレオナールがいらないか辺りを見回した。

ギースは部下思いの上司であつたが、任務のためなら切り捨てる厳しさも併せ持っている。それでもまだレオナールを探しているのは彼一人では水晶玉に魔力がこめられないためであつた。

ネレイドの港町はかつて繁栄していたこともあり規模が大きく、探し物にはあまり適していない都市だった。

「これやると隙ができちまうが仕方ねえ・・・」

ギースは全身を脱力させ眼を瞑ると、耳に意識を集中させた。

しんと静まり返る周囲、常人ならそれ以上の感想を抱かないであろうがギースは違った。

「近いな。」

僅かな空気の振動を彼は捉えていた。

慎重に二階建ての民家に近づき、ドアに耳を当てる。

十数秒後、ギースの顔は吐き気を催したようになった。

「あの野郎、捕まっちまってるのかよ……」

しかも会話の内容からして少なからず盗賊団の情報を話してしまっている。

考えうる限り最悪の状況。

これで3人組を殺さなければならなくなった。

「とりあえず助け出す、か」

そんなに広くないこの家のこと、監禁するのなら二階だろう。

腰のナイフを二本取り出すと壁の隙間に差し込み、それを足場として飛び上がり、そのまま窓を突き破る。

「ったく、手間かけさせやがって！」

当然憎まれ口に反応してくるだろうとギースは思ったが、またしても予想は裏切られた。

椅子に腰掛けさせているレオナールは俯いたままピクリとも動かない。

元アンドラスの突撃部隊隊長の勘が、一つの事実を示した。

素早く近寄ると手首を握り、呼吸音を確認める。

そして彼は確信した。

「死んでやがる……」

もつとよく見れば、おそらく死因であろう小さい穴が胸にあいているのが分かる。

ちよつと強いからって調子に乗っているガキだと思っていたが、まさか用済みになったら大事を取って殺すような奴らだとは……

同時に背後の扉が開き、当の3人が現れた。  
そしてレオナールが死んでいるのを認めた。

ベルフェゴールが息を呑む。

奇妙な沈黙は、イワキリとギースの全く同じセリフに破られた。  
片や部下を守りきれなかった自分に怒り、片や突然の侵入者に対し  
疑問を抱きつつ。

「てめえが、やったのか!？」

## 第十九話

ギースは腰の細身剣を抜くと、一番近くにいた鬼怒川を切りつけた。対して3人は突然の侵入者を敵と認識するのに、若干の時間を要したため反応が遅れた。

「つと。」

鬼怒川は反射的に義手である左腕で剣を受け止めた。

彼自身意識しての行動ではなかったが、結果的にただ受け流す以上の効果が表れた。

「・・・!？」

手袋をしている鬼怒川の手は外見上は義手と見えず、一見しただけだと生身の腕で剣を防いだように見える。それがギースの意識を混濁させた。

人間は自分の想定外の出来事が起きると一瞬、思考が停止する。そして戦闘においてその隙は致命的となる。

鬼怒川は関節をたくみに捻って義手を剣に巻きつけると、一気に力を込めた。

バキンと小気味いい音が響くと、細身剣は3つ以上のパーツに別れてしまった。

そこで止まらずすぐに右足をフルスイング。目標はギースの左頬。

「うげがっ」

うずくまるギースに対し、鬼怒川は興味をなくしたというように左腕をしげしげと眺めた。

「なるほど・・・盾として使用することにより相手の意表をつく・・・か。これはいいな。」

「さてさてさて、ちよつくら話を聞かせてもらいましょうかね」  
左腕を眺めブツブツ言い出した鬼怒川を見て、しょうがないとばかりにイワキリが口を挟んだ。

ゆつくり顔を近づけるイワキリ。第三者が見れば隙だらけな動作。

ギースもまた引つかかった。

しゃがんだ態勢から、短くなってしまうた剣をイワキリの喉へと突き出す。

「喧嘩は相手を見てから売るものだよ。」

イワキリは慌てず騒がず、右手でピースサインを作り、その真ん中で器用に剣を受け止める。

そのおどけたような仕草で避けられたギースは、今度こそ自分の敗北を悟った。

「人間って、結局自分が可愛いんだよね。いやそれを否定するわけじゃないけどもうちょっと粘って欲しかったな。」

時を同じくして、「ダイスの目」構成員である髑髏模様の麗人は2 kmほど離れた建物の屋上にいた。

自分の愛杖をまるで銃のように構え、先端をイワキリ達に向けて。

「ある程度抵抗したら、捕虜になった失態には目をつぶってあげたのに、情報話しちゃったら殺すしかないじゃんね。」

麗人は心の中で独り言を言いながら、杖の空洞部分に静かに、魔力を込めていく。

近くには誰もいないと分かっているけど、決して気を抜かない。体内に水を取り込み魔法によって酸素を取り出すことで呼吸音を消したり、血流を操って心音も極限まで抑えたりするなど、彼女は考え付く限りの方法で気配を消しきっていた。

必要最低限の動作で、杖の太さに合うよう加工した氷を先に詰める。周りの水蒸気の動きを魔法で読み、2 km先のターゲットの位置を割り出す。

そして2 km先の鬼怒川に正確に狙いをつけた。

「まずは、彼からよね。じゃあね。」

氷の玉を発射しようとして・・・動きを止めた。  
そして魔法を解放する。

「そうだった。ネレイドからセラティエルに移動するまでは攻撃しちゃいけないんだっけね。」

海に潜んでいるかもしれない「五つの座」をターゲットを使って探るため。そう彼女は言われていた。

少しの間麗人は考え、当座の行動方針を決めた。

もし3人が魔物に倒されたら。

その時は戦いで消耗した魔物を倒そう。どこら辺に出現するかは分からないが、私の索敵能力ならばセラティエル海岸ぎりぎりまで射程に捕らえられるだろう。

もし3人が魔物を倒したら。

同じように撃ち殺せばいい。

どちらにしてもいつも通り、最終的には氷の玉をぶち込むことになるのだ。

それまでのんびりしていよう。

彼女は構えをとくと、杖の手入れを始めた。

「何を言ってるのか理解できないんだが・・・」

「だから早く殺せと言ってるんだ。俺は何も話さん。一思いにやればいいだろう？さっきみたいによ！」

「さっきみたいにつて・・・いや、別に殺すつもりじゃなかったんだが・・・」

「俺をなめてるのか！？もう何でもいいから殺せ！」

3人は噛み合わない会話に内心頭を抱えていた。

因みにギースの言っている「さっきみたいに」はレオナル殺しのつもりであつたのに対し、3人は鬼怒川がギースを蹴り飛ばした事をさしているのだと勘違いしている。

「あーんもう！あなたを殺すかどうかは別にして！あなたは結局何なの？」

業を煮やしたベルフェゴールが言った。

「分かりきっていること。盗賊だよ盗賊。」

3人は顔を見合わせた。

「この死んでる人の仲間？」

「そうさ、お前達が殺した奴の仲間だよ。」

その言葉に、それまで眉間に皺を寄せて考えていた鬼怒川が目を開けた。

「分かった。要するにお前は俺達が殺したって思っているんだろ？でも違うんだよ。」

「・・・何？」

「この死体の傷、血が一滴も出ていない。まるで元からあったみたいに、な。お前が信じるか信じないかは自由だが、私達じゃこういつた殺し方はできない。何か特殊な魔法で『狙撃』でもない限りこんな風にならない。」

「そ、それじゃ・・・一体・・・」

「捕虜になったから情報話してしまう前にバラされた。そんなところだろう。」

「そんな・・・馬鹿な・・・こいつは仲間に殺されたっていうのか・・・」

その間、イワキリはギースの一挙一動、顔の表情まで細かく観察した。

自分達が殺したのでない以上、一番怪しいのは進入してきたこの男である。

しかし鬼怒川の言葉に動揺しているところを見ると、どうやら本当に殺された奴の仲間だったらしい。

そして同時に、重大な事実に気づく。

「外から撃たれたってことなら、こんなところに立ってたら俺達も危ないじゃないですか！」



「私も4秒前にその結論に達したが、今まで撃たれてないところを考えると、どうやら今私達を

どうこうするつもりは無いみたいだな。だから今重要なのは『気づいていない』振りをする事だ。」

「そんな事後承諾的な・・・それにもし狙撃されたんじゃないかったら・・・」

「おいおいイワキリ君、魔導師の私が狙撃と言ったんだから狙撃だよ。」

じろりとイワキリを睨む鬼怒川。

「流派の一つにあるんだよ。杖を空洞にして中に魔力をこめて、弾丸を発射するっていうのが。当たった相手は魔力を帯びた弾丸に精神力を奪われて衰弱死するらしいが、特徴として血が流れないっていうのがある。そしてそれはこの状況と完全に一致する。」

鬼怒川は言い終わるや否や、床に縛られて転がっているギースを蹴り飛ばした。

うめくギースと、豹変した鬼怒川に驚くイワキリとベルフェゴール。そして彼はそのままギースの胸倉を掴んだ。

「最後に一つ質問をしよう。すごく簡単な質問だ。答えたら解放してやるが、答えられない場合は俺の考え付く限り最高に残酷な方法でお前を殺す。」

鬼怒川の言葉にしんとなる室内。

「質問だ。ネレイドのどこに行けば船が手に入る？」

「ま、待て。俺は知らないんだ。」

「3秒以内だ。3、」

「俺は幹部だぞ！？これ以上盗賊団の怒りを買うつもりか!？」

「お前を殺すにしても、それはこちらの覚悟を示すことになる。どちらにしても損はないんだよ。2・・・」

「ほ・・・本当に知らないんだ・・・」

「じゃあ死ぬんだな。盗賊なんてやってるんだからそれぐらいの覚悟は出来てるだろ？1・・・」

「分かった、分かった。言うから、どうか命だけは・・・」

「嘘じゃなければ、な。どこだ？」

「教会の・・・近くだ。ここから300mぐらいのところに船の格納庫がある。今は使われてないから古くなってるかもしれないが・・・赤い屋根の建物だ。」

「イワキリ君。」

「はい先輩。」

イワキリは自分に何が求められているのかを一瞬で理解した。

窓から教会の尖塔を目印に、赤い屋根を探す。

そして見つかり、さらに目を凝らし、中に船があることを確認した。

「ありました。」

「む、そうか。」

「俺の言ったことはあつてただろ？だから解放してく・・・」

そこで突然ギースは押し黙った。

目の前の敵が、いつの間にか取り出した鉄棒を振りかぶってたからだ。

「じゃあこれで、お前とはさよならだな。」

「おい、まて、約束が違うぞ！」

それに対して、鬼怒川は全く表情を変えなかった。

冷たい殺気を放つその姿は、まるで氷の彫像である。

ギースは戦慄し、そして自分の認識が甘かったことに気づかされた。最初の印象はただの調子乗っているガキ共。

次は敵を殺す覚悟のある奴ら。

しかしどちらの認識も、目の前の男には当てはまらなかった。

その雰囲気はそんなに生易しくなかった。

彼は縛られていたから恐怖しているのではない。もっと違う次元の恐ろしさ。

それは丁度、神々しいものに対して思わずひれ伏してしまうような畏怖の感情。そして死への恐怖。

そんな思いにとらわれたギースは思わず呟いてしまう。

「鬼・・・」

彼の言葉と同時に、鉄棒は振り下ろされた。

## 第二十話

「きゃあ！」

ベルフェゴールは鉄棒が振り下ろされたのを見て、思わず声を上げて目を逸らした。

「い・・・いくらなんでもローグさん酷すぎますよ！」

顔を背けながら彼女は言った。それはまだ会ってから日の浅い鬼怒川でも十分に感じ取れるほど嫌悪に満ちていた。

「そんなこと、英雄のすることじゃありません！」

「何が英雄のすることじゃないって？」

その言葉に思わず振り返るベルフェゴール。

彼女の目に映ったのは・・・にやにやしているイワキ君と苦笑している鬼怒川の姿である。

そしてギース。しかし彼女が想像していたのと大分様子が異なっていた。

「・・・あれ？」

「言ったじゃないかベルフェゴールさん。必要の無い殺人は犯したりしないって。縄を切っただけだよ。」

恐怖のためか気絶してしまっているが、ギースはこれといって変わった様子はなかった。

「よ・・・良かった・・・」

同時に、彼女の中で鬼怒川を信賴していなかったことに対する後ろめたさが芽生える。

それを押し隠すため、彼女は無理に話を続けた。

「なんていうかその・・・あまりに鬼気迫る様子だったので・・・」

「確かにそれは俺も感じました。何か魔法とか使ったんですか？」

「いいや、全然。」

鬼怒川は鬼怒川で二人の様子と先程の感情に対し、不安と疑問が頭をよぎっていた。

あの鉄棒を振り下ろそうとした刹那。彼は唐突に「この鉄棒を頭に振り下ろせたらどんなに気持ちがいいだろう」と感じていた。

それは彼がかつとなった時と同じような、暴力的で野蛮で、目に入るもの全てを壊したくなるような衝動にかなり似通っていた。

元の世界にいた頃よりも鮮明になっていく「二つ目の人格」。

彼はその事実には戦慄しながらも、他の二人に悟られないよう振舞う。

「さてそれじゃ、船を取りにいかうか。」

「先輩、危なくないですか？」

「狙撃のことだろ？ふむ、イワキリ君なら、きっと疑問に思うと考えていたよ。」

そのセリフにちよつとむつとなるベルフェゴール。

その様子を見てすかさずイワキリはフォローを入れた。

「そうですか？俺は別に深い意味があつて質問したわけじゃないんですよ。なんとなく思いついたまま言つてみただけで・・・」

その返答に小首を傾げる鬼怒川。他人の表情を伺つて行動したりしない彼はその発現がフォローだと言うことに全く気づいていない。

「そうなのか？まあいい。さっき私が狙撃について、心配要らないと言つたのは単に撃たれてないからというわけではもちろん、無いちゃんとした理由があつてのことさ。捕虜の・・・えーとレオナールだっけ？そいつが尋問のとき言つた『ベラドンナ様はこの近くに魔物が潜んでいると考えている』というセリフからだ。」

そこで言葉を切り、めつたに見せない悪戯っぽい表情で2人を見た。君たちには分かるかい？という仕草である。

ベルフェゴールが名誉挽回とばかりに意気込んで答えた。

「私達をセラティエルまで渡らせて、魔物に当たらせようと考えている。ということですよ

ね？」

「その通りだ。ベラドンナの性格からいっていくら捕虜になつたとはいえ、身内を手にかけるといふのは相当な事情があつてのことだろう。それはずばり、先ほどの情報、つまりセラティエルに渡るま

で手を出さないということだ。それが伝わるのはまずいから撃たせただよ。しかし時既に遅しというわけで、こっちは知っているわけだ。これはすごく重要な事さ。」

私の考えが間違っているという可能性もあるがね、と鬼怒川は締めくくった。

「さて、説明が終わったところでそろそろ行こうか」

ベルフェゴールが「了解です。」と返事しているのを聞きながらイワキリは考えた。

もし暗殺者の攻撃範囲がセラティエル海岸まで届くのであれば、このまま渡るのは危険だ。魔物を倒した瞬間にこちらを殺そうと考えてるかもしれないからだ。それより時間がかかるにしても今暗殺者を探して叩いてしまった方がいいような・・・

「どうしたんですか、イワキリさん？」

「ん、いやなんでもない。」

彼は考えるのをやめた。

それは鬼怒川を信用してというよりも、一々質問するのが面倒だったためである。

彼の直感も、あまり追及しなくても大丈夫だろうと結論を出していた。

「退屈、退屈、退屈・・・」

時を同じくして、セラティエル国の海岸とネレイド港の中間地点の海底で、魔物が呟いた。

「・・・やっぱ、全部の船を沈めちゃうのはやりすぎだったかしら・・・」

まどろんでいるようにゆっくりと瞬きを繰り返す。そのたびに黄色い瞳が見え隠れする。

「早く来ないかな・・・そうすればまた歌えるのに・・・」

殺されない限り死なない不老の肉体。

それはかつて魔物が人間だった頃、欲してやまないものだったが、手に押し付けられる形で得てしまった今は、この事実が悲しみとなつて魔物を圧迫している。

永遠に近い存在は、最も孤独に近い。

魔物は何百年生きてきた中で、それだけが真実らしく思われた。

「つらい、つらいなあ・・・」

何度目になるか分からないセリフがこぼれる。魔物となつてしまった今、涙を流すことすらできない。

後数時間でその状態に終止符が打たれることを魔物は知らなかった。

「にしても、イワキリ君もベルフェゴールさんも船を動かせたなんてちょっと意外だな。」

「そうですか？こんなの直感で何とかなっちゃいますよ？」

「私にしても本で得た知識をイワキリさんに伝えているだけですし・

・・・」

毎年バカンスに行っているためかヨットやクルーザーの運転についてかなり詳しいイワキリと、レバーレンスの航海術について本で一通りの知識を得たベルフェゴールによって、3人が乗った船は順調にセラティエルへと向かっていた。

鬼怒川はいつ現れるとも分からない魔物のため見張りを行っている。

「あ、なんだか急に霧が深くなってきましたね。コンパスあるから大丈夫ですけど、なんかいやーな感じがですね。」

「ローグさん、魔物は・・・？」

「今のところ魔力は感じ取れない。」

そう答えつつも神経を研ぎ澄ませ続ける鬼怒川。

持ち前の集中力を発揮させる彼は、しかし2人の様子の変化に気づけなかった。

背後の足音に振り返る鬼怒川。

「・・・！？おい何やってるんだ？」

操舵輪から手を離し、ふらふらと甲板を歩き出したイワキリと、同じような状態のベルフェゴール。

そのまま海に飛び込もうとする2人を寸でのところで鬼怒川が引き戻した。

「何だ・・・いったい何が起こっている・・・？」

振り払おうとする2人を押さえつける鬼怒川は、霧の中で微かに歌声のようなものを聞いた気がした。



## 第二十一話

鬼怒川 龍一の才能。

それは絶対的な「意思の力」である。

彼は人並みに感情を持っていたが、それが行動に影響することは決してなかった。

一度目標を立てたら完遂するまでどのような誘惑にも負けることが無かった。

その力故に、彼は無意識のうちに精神攻撃、憑依、恐怖喚起、幻覚に対して異常なまでに高い耐性を獲得していた。

眠れる特性が、英雄ツアーによって呼び覚まされたのである。

しかし皮肉なことに、彼の防御力は攻撃されているのが分からないほど卓越していたため、彼の人を省みない性格ともあいまって事実の認識という点で大きく遅れをとってしまう。

現在の彼も丁度そのような状態に陥っていた。

「この音が原因なのか・・・？」

彼の膂力も2人合わせた力の前に徐々に進行を許してしまっていた。鬼怒川は必死で思考し続けた。

不幸中の幸いと言うべきか風は進行方向吹いていたので、舵取りさえ何とかなればセラティエルに行くことはできた。

「どうすれば振り切ることが・・・」

・・・いや、だめだ。そんな逃げに走るような行動じゃだめだ。

彼は自分で自分の考えを否定した。

これはピンチであると同時に、最終目的である「魔物退治」を達成するためのチャンスでもある。今セラティエルに着いてもどちらにせよこの魔物を叩くために戻らなければならないのであれば意味がない。

「・・・といってもどうしようもないがな。」

鬼怒川はより力の強いイワキリを抑えるため杖を出し、彼の体に引

っ掛ける。

それと同時に、イワキリの呆けたような表情が元に戻った。

「あれ？先輩何やってるんですか？ってかベルフェも・・・？」

「・・・正氣に戻ったのか？」

鬼怒川は自分の杖に視線を落とした。

「なるほど、精神の具現化とな・・・」

「どういうことですか？」

「よく聞いてくれイワキリ。今我々は魔物に攻撃されている。この歌声みたいなのがそうだ。海に飛び込みたいと思わせる精神攻撃の一種だろう。」

「・・・いきなりですね。」

「いきなりというか、さっきのイワキリ君もベルフェゴールさんと同じような状態だったんだが・・・まあそれはいい。どうやら私の杖に触れているとその攻撃が効かないみたいだから、これに乗って本体の魔物を叩くんだ。」

「オーケイです先輩。」

「杖を止めたいところで大声を出して合図してくれ。」

イワキリは頷くと、歌声のする方へ向き杖に乗った。

「頼むぞ。」

「任せてください。」

ベルフェゴールがうつろな顔で何も言ってくれないのをちょっと悲しく思いながら、イワキリは船を離れた。

「おかしい・・・どうしてなの・・・」

岩礁の一つに腰掛け歌う魔物は、いつまでも海に飛び込む様子の無い相手に苛立ちを覚えていた。

全く効いていない、というわけではなく、現に2人は後ちよつとで船から落ちるところだった。

それを何者かが邪魔したのだ。

「私の歌が聞こえないのかしら・・・」

魔物は本格的に歌おうと立ち上がり、息を大きく吸い込む。

しかし不意に起こった風に危険のシグナルを感じ取り、そのまま後ろへ倒れこむ。

魔物の頭上すれすれを大剣が通り過ぎた。

「ストロープ！」

洋上に響く大音声。

魔物は顔を上げ、声をあげた相手を確認する。

黒一色の服、右手にたった今投げたはずの大剣を持った少年だった。鉄の棒に乗ってバランスよく宙に浮いている。

「誰・・・？」

「ありきたりなセリフで申し訳ないが、人に名前を尋ねるときは自分から基本だぞ？」

少年 イワキリは不敵に笑いながら「と言っても・・・」と続ける。

「その姿を見れば分かるか、魔物さんって」

青白いというより透明に近い白い肌。何層にもわたって体に巻きつけられたボロ布。

そして「蛇」の「髪の毛」。

イワキリの世界で言うところの「メデューサ」だった。

彼女は興味深そうに黄色い瞳を動かしながら、イワキリを見据えた。「私の歌って下手かしら？」

鬼怒川なら無言で大剣を振り下ろすであろう場面。しかしイワキリはくだらない軽口の応酬が好きだったので、にやりと笑いながら茶化した。

「上手い下手以前の問題だね。歌うと聞いた人間が死にたくなるなんていうのは公害だよ公害。」

魔物は悲しそうに俯きながら言う。

「そう・・・正気を保っているあなたはきっと分かってくれると思うたのに・・・」

その様子にちよつと言い過ぎたか、と心を痛めるイワキリ。

背後で盛り上がったっている水の柱には気づけなかった。

「死んで。」

水の柱は槍の形をとり、イワキリ目掛けて落ちてくる。

「・・・！？」

先端は身を捻ってかわすが、残りの水流をもろに受けてしまう。

イワキリは海に落ちそうなところを辛うじて左腕で杖を掴んだ。

「魔物になるとね、人間の肉がとっても好きになるの。あなたもおいしく食べてあげるからね。」

いつの間にか杖の上に乗る、イワキリを見下ろす魔物。

手には凝った作りのナイフが握られている。

それを見たイワキリは思わず顔をしかめた。

「最後に私の歌を聞かせてあげるわ・・・」

無音の洋上、霧が立ち込める中、歌が魔物の口からこぼれる。

甘く優しく、しかし何の温かみも感じさせない冷たい歌。

それどころではないはずのイワキリも、一瞬聞きほれてしまう。

歌いながら魔物はゆっくりと、着実に一本ずつイワキリの指を杖からはがしていった。

「く・・・そ・・・」

全身全霊をこめて握る指も、努力むなしく確実に杖から外されていく。

せめて、とばかりに振り抜かれる大剣も難なく避けられてしまう。

そして最後の一本が離れた。

イワキリと魔物の視線が空中で交差する。

そのまま彼は海へと吸い込まれていった。

「うぐぐぐ・・・」

そのころ鬼怒川は突発的な頭痛に目がくらんでいた。

彼の耐性も、杖に対するゼロ距離での攻撃によって深刻なダメージを負っていた。

それでもなお理性を保っている鬼怒川だが、ベルフェゴールへの注意が逸れてしまう。

「・・・あっ！」

ベルフェゴールの踵が彼の足を強打する。

それでも掴んだ服を離さなかった結果、よろけた彼はベルフェゴール共々柵を乗り越えてしまった。

澄んだ水音が辺りに響いた。

## 第二十二話

身を切るような冷たい海水の中、呪われた歌が脳に充満して意識が飛ぶ前に、イワキリは自分の乗っていた杖が消えているのに気がついた。

「先輩も・・・やられたのか・・・」

攻撃の機会を魔物に与えてしまった自分の責任だ。

ああ俺は死ぬのか、グッバイ俺の人生。

朝の通勤ラッシュのように理性が身動きを取れなくなっている中、イワキリはそれでも、と口を動かした。

「他の2人は助けてくれ。」

相手に伝わったかどうか確認する前に、彼の意識は深い闇へと沈んでいった。

「もっとなぶればよかった。」

魔物はつまらなそうな顔をしながらつまらなそうな声で言った。

丁度、おいしいお菓子を口いっぱい頬張って味わう前に飲み込んでしまったような気分である。

「ま、後二人いるし。」

愛おしそうにナイフを舐める魔物。

魔物は栄養を摂取しなくても死んだりしない。故に食事は嗜好の一つである。

それでも生き方が限定されている彼らにとってみれば重要だった。だから楽しむことに集中してしまい、油断してしまったのも仕方ないと言える。

まずはどこから食べようかしら、と腕を伸ばした矢先である。魔物は背中にデコピンされたようなかすかな痛みを感じた。

彼女は動きを止め、背中に手を回して原因を探ろうとしたが遅かった。

痛みを感じた部分がまるでブラックホールにでもなったかのように、体中の力という力が吸い込まれ始めた。

普通の人間ならば突然のことに反応できず取り乱す場面であるが、何百年と生きてきた魔物は少し違った。

漠然とした滅亡の予感。

死にたい死にたいと前から思っていたのが、唐突に叶ってしまう戸惑い。そして死に瀕して初めて抱くもう少し生きたかったという矛盾した思い。

自分なりの結論を出す前に、魔物は事切れた。

「任務完了、と」

杖を構えながら呟く髑髏の麗人。

魔法を解くと同時に深い疲労が彼女を襲う。

気配を消す魔法は体に相当な負担を強いていた。

視界が揺れ、思わず手についてしまいながら彼女はハンター3人のことを考えた。

あの時は3人が海に落ちた時点で死亡と判断したが、念を入れて生死を魔法で探るべきか・・・

天秤の一方では休息が、もう片方では任務続行が乗せられていた。しかし彼女の精神力がこれ以上の任務を拒否し、休息の方をぐっと押し下げた。

彼女は帰り支度をしながら、若干言い訳じみたセリフを自分に言い聞かせる。

「魔物がホームグランドである海に落ちた獲物をすぐ殺さないはずないし。」

彼女の思考過程には「魔物が獲物をなぶるかもしれない」という事象が全く欠落していた。

イワキリは夢を見ていた。

前後左右上下が分からない真っ暗な空間で、彼はポツンと立っている。

ここがどこなのか、なぜここにいるのか、得てして夢ではそんな事に疑問を持つ人間は少ないのだが、イワキリも例外に漏れずそういった事柄には何も興味が無かった。

やがてぼんやりともやのようなものが浮かび上がり、それは人の形になった。

ベルフェゴールの姿だった。

「途中で諦めちゃうなんて、らしくありませんよイワキリさん。」  
彼女は優しく、しかし真剣な顔で言った。

イワキリは返事をしようとしたが、まるで顎に枷でもはめられているかのように口は動かなかった。

焦燥感に駆られながら無理に舌を動かそうとしていると、やがて白い煙は鬼怒川の形になった。

「君みたいな気高さを持った人間が、あがこうとしないのは恥だ。」  
部長らしい厳しい意見だ。そう思うとまた煙は変形した。

白と赤の派手派手なスーツににやけた顔。

脳の片隅に追いやられていたエウリノームだった。

「僕はね、最後まで向かってくるであろう相手としか戦わないんだ。」

挑発するような口調に猛然と反発したくなるが、やはり言葉は出ない。

煙は次にベラドンナになった。

「あなたの命の重みは、そんなもんなの？」



見下すような姿勢で言われたイワキリは掴みかかろうとして、突然体が水槽にでも放り込まれたように冷たくなった。

「な、なんだ!？」

イワキリはそこで夢から覚め、自分が海に漬かって凍えていることに気がついた。

同時に今までのことがフラッシュバックする。

慌てて辺りを見回すが、水面に立っていた魔物はどこにもいなかった。

白く立ち込めていた霧もどこかに消え去っていた。

自分は天国に来たのか? いや天国ならもう少し暖かいだろう、じゃあ地獄か・・・とイワキリは全然見当違いのことを考え始めるが、水面に浮かんでいる短剣が目に入り思考は中断された。手に取り、確信を持つ。

「これ魔物が持ってた得物だよな・・・?」

つまり、全く考えにくいことだが、誰かが意識を失っている間に魔物を倒してくれた、ってことか・・・?

イワキリは最も可能性のある鬼怒川とベルフェゴールの事を思いつくが、すぐに有り得ないと打ち消す。

「・・・ま、いいか!」

魔物は死んで、この旅の目的である得物をゲットできたんだから、結果オーライだな。

イワキリの単純とも言える楽観主義の思考回路は決定を下した。

とその時、彼の耳に水音が聞こえた。

振り返るとこちらに向かって慎重に泳いできている2人の姿があった。

イワキリが口を開く前に、鬼怒川は唇の前に人差し指を立てて音を立てるな、という仕草をした。

身振りで耳を貸すように伝える。

「・・・魔物が倒されたのはおそらく、捕虜を殺したヒットマンの仕業だ。私達が死んだと思って撃ったんだろう。だからここからは

船を捨てて泳いで行きたいと思う。うまくすればこれから先盗賊団の妨害を受けずに旅できるぞ。」

ひそひそ声でありながら、鬼怒川の声は珍しく興奮していた。

イワキリは再度周囲を見回した。

霧が晴れたためセラティエル海岸はよく見え、距離にしても3km程で泳いでいけない距離でもなかった。

しかし問題は・・・

イワキリは仕草でベルフェゴールに、大丈夫かと問いかける。

それに対しベルフェゴールは笑顔で大きく頷く。

3人は静かに、見晴らしの良くなった海で誰にも見つからないよう泳ぎ始めた。

同日、すっかり日が落ちてしまった頃、セラティエルの港町にて一人の少年が食事をしていた。

黒いマントを羽織ったままでいなければ誰もが惚れ惚れするような

「上品さ」を彼はまもっていた。

伸びた背筋、完璧なテーブルマナー。

彼に近い席の女性客にちらちらと盗み見られるほどの美貌。

しかし彼はまるで病人のように青い顔をしていた。

程なくして食事が終わり、会計を済まそうと立ち上がったところで少年は新しく入ってきた客が目に入る。

ベージュのローブ、全身黒い服、青いワンピース。

少年は体の向きを変えるとトイレへと向かう。

個室に入り鍵をかけると彼は水晶玉を取り出し念じた。

程なくして髑髏の麗人の顔が映った。

「何ペヨーテ？あんたが連絡してくるなんて珍しいね。」

「おいローズ、セラティエルのアスラフィル港にいるんだがさっき例の3人を見たぞ。どういうこったよこれは。さっき始末したって

連絡よこしたじゃないか。」

しばらく続く無言。いい加減ペヨーテが怒鳴ろうとした瞬間に、ああ、と気の抜けた答えが返ってきた。

「生きてたんだあいつら」

「生きてたんだじゃねー！お前どうして見逃したんだアホが！」

「んーとね、魔物に3人とも海に落とされたみたいだったから魔物を撃つたの。それでまあ死んでるか確認するのが億劫になったというか・・・」

ペヨーテはまるで眉間に糸がつけれ引っ張られているかのように皺を寄せながら、無理やり落ち着いた声に言った。

「お前の狙撃術は体に負担がかかる。それは分かってる。だが魔物が3人にとどめを刺したのを確認してから撃つても遅くないよな。」

「そうだけど・・・なんていうか、3人が死んだって思った途端にこう、すぐに撃つちやいたくなつたっていうか」

「そうだ、この女は発砲中毒なんだった・・・」

こいつに同士討ちを待ってからもう一方を撃てと言うのは、躡けられていない犬にご馳走を出しておきながら「待て」をしているようなものだ。

深い深いため息をつきながら、目が合ったりしたらキレて水晶玉を割ってしまいそうだったので顔を伏せつつ、ペヨーテは言った。

「近くにいる仲間と組んであいつらは倒すよ。とりあえず魔物退治お疲れさん。」

「んーがんばってね。」

そこで通信は切れた。

「あの馬鹿が・・・」

ペヨーテはトイレを出ると、先程までの「紳士」を演じながらレジへと向かった。

## 第二十三話

「さて、今後どうするかだが・・・」

イワキリ、鬼怒川、ベルフェゴールの3人は宿の一室、イワキリの部屋に集まっていた。

沿岸漁業が盛んで噂も無いため、ネレイド港とは比べ物にならないほど活気がある港町の宿、部屋はそれほど広くないが清潔だった。因みに宿代は鬼怒川の負担である。

「私からは二つのプランがある。一つはエームへ行きセラティエル王ヘネレイド、アスラフィル間の魔物を退治したことを報告する。もう一つは捕虜から聞いたこの大陸の巣窟へ行き、魔物を倒す。他には何かあるかな？」

「まあどつちかですよ。俺は最初の案に賛成です。装備を整えなくちゃいけませんし、とりあえず王様から報酬貰いましょう。」

本当は「ベルフェゴールの武器の購入」と言いたかったのだが、そうすると暗に今の彼女が足手まといだと言ってるようだったので、オブラートに包んだのだった。

鬼怒川には出来ない配慮である。

「そうだな。今の状態で巣窟に突っ込んでもベルフェゴールさんが危ない。何か武器を購入しなくては。」

その配慮をいとも簡単に打ち砕く鬼怒川。

イワキリは内心頭を抱えた。

「すいません、私も何かお役に立てればいいんですけど・・・」

「いやあなたの知識は十分役に立ってますよ。現にイワキリ君も井戸の一件ではあなたに命を救われたわけですし。」

「そうですか、それならいいんですけど。」

ちよつと明るくなるベルフェゴール。

鬼怒川は人に気をつかったりしない反面、事実を曲げて人を責めるようなこともしなかった。

無論そのことをイワキリは知っていたが、彼の場合は何事も少し遠まわしに言った方がいいという考えである。

しかしこの場では当のベルフェゴールが明るくなったので、彼もそんなに気にしなかった。

「それじゃ、報告しにエームへ、ということでもいいかな？」

「賛成です。」

「私も。」

「じゃあこれで解散・・・」

イワキリと鬼怒川が腰を浮かしたところで「待ってください」とベルフェゴールが止めた。

何かを後ろ手に持ちながらニヤツと笑う。

「私、盗賊団の飛行船から逃げるときにちょっと取ってきたものがあるんですけど・・・」

「何！」

「なんだって!？」

飛行船から盗んできた。そしてそれをわざわざ言うということは今後の旅で役立つものであるということ。

イワキリと鬼怒川は全く同じ結論に達し、真剣な顔になった。

それを見てベルフェゴールが途端に萎縮した。

「あ、いや、あの、すごく下らないものなんですけど・・・」

そうしてワンピースのポケットから出したのは・・・一本の酒瓶だった。

イワキリと鬼怒川は互いに顔を見合わせた。

丁度、イタリア料理店で寿司を出されたような表情である。

「あ、あの・・・タグリヌスの魔物を倒したわけですし、その・・・打ち上げ・・・みたいな・・・」

「・・・ベルフェ、俺も少し気を抜くのも大切だと思うけど、しかし酒というのは・・・」

「・・・?、お酒嫌いですか？」

「いや、嫌いというか飲んだことが無い。」

少し驚いたような顔をするベルフェゴール。

「確かに飲みすぎると健康に悪いですけど、おいしいですよ？あ、もしかしてイワキリさん達の世界では貴重だったりしたんですか。」

「法で制限されていてね。20歳以上じゃないと飲めないんだ。」

「そうですか・・・じゃあ駄目ですね。」

酒瓶を仕舞おうとしたベルフェゴールを鬼怒川が止めた。

「法律は国内においてのみ適応される。そして私の記憶する限りセラティエル法の未成年飲酒についての規定は無い。というわけで今私達が飲むのは何の問題も無い。」

丁寧に拒否するものだと思っていたイワキリは音を立てそうな勢いで振り返った。

「先輩！？」

「実は私も前から飲んでみたいと思ってたんだよ。」

「じゃ準備しますね〜」

嬉々としてコップやつまみの準備をし始める2人を、イワキリは呆気にとられて見ているだけだった。

「エウリノーム様、先程タグリヌスのリリスが討たれたとの報が入りました。」

魔物の巣窟に野太い声が響く。

目立たない洞穴である入り口とは裏腹に、内部は城の回廊に近く、奥にはセラティエル国の王の間に似せて作られたエウリノームの部屋があった。

話しているのはイワキリが闘った牛の怪物である。

彼の重大な報告を、しかしエウリノームは心ここにあらずといった雰囲気で何かを考えているようであった。

「・・・エウリノーム様？」

「あ、うん、わかった。下がって良い。」

入り口の闇へと消えていく怪物の姿をながめながら、彼の報告を反芻した。

「リリス・・・かつて敵対し血みどろの戦いを繰り広げた私の妹・・・死んでしまったか。」

彼はゆっくりと白い手袋を脱ぐ。

蛇の黒い鱗をまとったような、お世辞にも人間の手には見えないようなものを、エウリノームは見つめた。

「不思議なものだ。かつて憎んでいたのに、今こうして死んでみると悲しみが湧き上がってくるとは」

リリス。彼女には他の兄弟が持っていた「自分の手下を作り出す能力」がなかった。

故に人間の迫害を恐れて海の底で生活することを余儀なくされたのである。

そしてその寂しさが、彼女に悪魔の歌声を授けたのだった。

突然、エウリノームの頭に突拍子も無い考えが浮かぶ。それは彼にとってでは唾棄すべきものであったが、一度思いついたそれは一瞬にして彼の中で打ち消すことが出来なくなるほど大きく膨れ上がった。「まさか神は、魔物相憐れみ、というわけで私達兄弟の仲を戻そうとでも・・・？」

数百年来の凄まじい怒りに突き動かされ、エウリノームは手袋を外した拳で玉座を殴った。

バラバラに崩れる玉座。

それは五人の兄弟が王位を巡って争っていた頃、たった一つの神の呪いによって離散していった様子に似ていた。

「ふふふ、もう飲めませんか？イワキリさん」

「うう目がまわる」

寄りかかって甘えたように言うベルフェゴールと、ふらふらで机にぐたーとなるイワキリ。

そんな様子を面白そうに笑いながら・・・しかし内心では油断無く緊張している鬼怒川。

綱引きの綱のように張りつめている。

体が火照り、上気しているものの、「意思の力」によって彼の精神状態はアルコールによる影響を逃れていた。

なぜ突然酒を出したりしたのか。

彼は僅かにだが、疑っていた。

その真意を確かめるために、敢えてベルフェゴールの打ち上げの提案に賛成しているように見せかけたのである。

もしや彼女は実は魔物か盗賊団の仲間で、隙を作って我々二人を殺そうと考えているのではないか？

それとも実は彼女はどこかで入れ替わっていて、今の彼女はベルフェゴールの姿をとった偽者なのではないか？

グラスを傾けながら、いつでも杖を握れるようにと肩の凝りをほぐす。

そしてベルフェゴールは確かに企んでいた。しかしそれは鬼怒川の考えているようなものではなく、ささいな、でも彼女にとっては重大なものであった。

「もう、起きてくれないなら起こしちゃいますよ」

彼女は突っ伏しているイワキリを横向きにすると、彼の唇にに自分の唇を重ねた。

いわゆる「キス」である。

さしもの鬼怒川もあまりに突然すぎる事態にフリーズしてしまった。彼は様々な事柄に対し起こりうる展開を数通り考え付くことが出来たが、これには予想外過ぎて事実を認識すること自体に2秒の時間を要してしまった。



キスする瞬間、ベルフェゴールの目は「マジ」だった。決して酔った上での出来事ではない。

明らかな確信犯である。

そしてそれは何を意味するのか。

そこまで思い至って鬼怒川はやれやれと苦笑した。

酒を出したのは酔うことによってベルフェゴール自身を思いとどまらせる理性を吹っ飛ばすため。

飲んだイワキリが彼女がしたことを覚えていないように、また仮に覚えていたところで「酒の席だから」とごまかせるようにするため。このベルフェゴールとやら、可愛い顔して結構な食わせ者だな。

鬼怒川は自分の最悪の予想が外れたこと若干安堵しつつ、新たに発生した問題に頭を痛めながら片づけをするためにグラスを降ろした。

「ん、ん？」

イワキリはガチガチに固まった体を起こしながら、自分が昨夜酔っ払ってテーブルに突っ伏して寝てしまったことを思い出した。

「ったく、ベルフェとキスだなんて、どんな夢見てるんだよ俺・・・」

「妙にリアルな夢だった、と彼が思い返していると頭痛に襲われた。」

「14にして二日酔い・・・どんだけ荒れてるんだか。」

目を細く開けて辺りを見回すと、かなり散らかっていたはずの室内が全て綺麗に片付けられていた。

はっと肩に手をまわすと、寝てしまった自分に誰かが制服の上着をかけてくれたということに気がついた。

「お礼言っておかなきゃ・・・」

彼は鬼怒川の部屋を訪れた。

ドアをノックすると普段通りの鬼怒川が出てきた。

彼には二日酔いの影響がなかったらしい。

「おはようございます先輩。」

「ん、おはよう。」

「昨日は片付け手伝わなくてすみませんでした。それに上着も」

「いやいいよあれぐらい。それに上着はベルフェゴールが掛けたんだ。」

「そこまで言つて鬼怒川は思い出し笑いをするようにちよつと微笑すると、イワキりに問いかけた。

「見たところ二日酔いのようなだが、昨日の記憶はどうだい？」

「記憶・・・？はつきりしてますよ。」

「それならベルフェゴールがしたことも・・・」

「そこまで言われてイワキりは夢うつつの中、自分にベルフェゴールが上着を掛けてくれたことを思い出した。

「・・・あ、よく考えれば、そうか、そうだったか・・・」

「ふふ、驚いただろ？」

「え？いや、嬉しいかったですけど、そこまで驚くようなことでも・・・」

そのセリフに鬼怒川は耳を疑った。

彼は昨夜の「キス」を「ベルフェゴールがしたこと」として話していたので、イワキりがどう解釈したかなんて露知らず、驚いていないイワキりに驚いていた。

「ほ、ほう・・・ちよつと予想が外れたな。」

「まあ元の世界にいた頃もあんなことありましたし。」

「初めてじゃない！？」

「あ、いや、もちろん酒を飲んでぐでんぐでんになって・・・というシチュエーションは初めてでしたけど・・・先輩？」

イワキりは話の途中から額に手を当てて、何やら考え込んでいる鬼怒川が心配になって声を掛けた。

「イワキリ君に対する印象がかなり変わってしまったな・・・」

「へ？どういう意味です？」

「まあ気にしないでくれ。過去は問わんよ。それよりそろそろ朝食

の時間だからベルフェゴールを起こしに行こう」  
イワキリは前半のセリフに疑問を抱きつつ、鬼怒川と共に彼女の部屋へと向かった。

## 第二十三話（後書き）

今話に未成年飲酒を擁護する目的は一切ありませんので。一応断りを入れておきます。

## 第二十四話

飛行船の自室で、ベラドンナはゆっくりと流れていく雲を眺めていた。

その手には報告書が握られている。

彼女はタグリヌスの魔物が死んだと知るや否や、直ちに魔導師の部下を数名派遣して海底を隈なく探らせた。

しかし魔物の巣窟も魔具も見つからなかった。

これは何を意味しているのか。そして次に自分は何をしなければならぬのか。

ベラドンナは目を閉じ、今までの情報を正確に分析していく。

魔法の弾丸によって吸い取られた魔力が尋常ではなく、暗殺に当たったローズが体調を崩していることから倒した魔物が「五つの座」であることは間違いない。となればこの「五つの座」は自分の住処と手下がない孤独な存在だったのだろう。

ならば魔具が無いのはなぜか。これには二つの解釈がある。

一つ目、そもそも魔具なんてものは存在しなかった。

二つ目、戦闘中にイワキリ達が奪った。

後者ね。ベラドンナは即座に判断した。

「汝の欲する英雄は、セラティエルに現れるだろう」夢のお告げの内容はこうだ、とイワキリ達には言ったが実は続きがある。

「英雄を手に入れば、汝が得ようとする宝物への道は開かれる。．．

・だっけね。」

宝物は即ち、五つの座が持つ魔具のこと。それ以外考えられない。となれば「魔具は存在しない」という仮定は消える。

それにイワキリ達が奪ったとすれば合点がいく。

英雄が魔具を持っているのだから、その英雄を手に入れば当然自分のものになるからだ。

しかし、とベラドンナは雲を眺める目を細めた。

英雄を手に入れる「魔具入手ということであれば、果たして「道が開かれる」という表現を使うだろうか。そこだけがどうしてもしっくり来ない。

そんな彼女の耳が、室内に響くノックの音を捕らえた。

「開いてるわ。」

重厚なつくりのドアが静かに開かれる。

「失礼します。先程3人組が乗っていたと思われる船が発見されました。中は無人であったことから・・・」

「奴らは死んでない。」

皆まで言わず口を挟んだ。

くだらないことを聞かせるな、私の考えの邪魔をしないで。部下の顔さえ見ていない彼女は態度で感情を表していた。

どう答えたらいいのか戸惑う部下を前に、ベラドンナはしょうがないわね、とばかりに聞いた。

「帆、どうなっていた？」

「降ろされていました。」

「普通、魔物と戦闘して敗れて海に落ちたのだとしたら、帆はそのままになるでしょうね。それがわざわざ降ろされていたというのは流されていけないようにするため。そして私達に敢えて発見させて死んだのだと勘違いさせるため。」

もう用はない、とばかりに背を向けるベラドンナを前に、部下は成すすべもなかった。

「・・・失礼しました。」

背後で扉が閉じる音を聞きながら、彼女は結論を出した。

奴らはただ職業として魔物を狩っているわけではない。理由は分からないが自分と同じように魔具を狙っている。

「面白くなってきたわね。」

自分の要求に対し「NO」といったイワキリ達は絶対に殺さなければならぬ。しかし急ぐ必要は無い。じっくりでいいのだ。

「この私に敵はいない、他者は味方か獲物にしかなり得ない。」

なぜなら、力は圧倒的な力の前では無力となるから。

悪魔じみた自信と能力を持つ彼女の中では、それが真理だった。自分のペースで事を進めよう。

彼女は報告書を丸めると、空中に放り投げた。

彼女の影が立ち上がり、音も無くそれらを飲み込む。

後には静寂だけが残った。

ここに来て心配事が増えるとは・・・

鬼怒川は唇を噛んだ。

無知な信仰と盲目的な愛情。

彼が最も忌むべきものとして心の中に刻み込んでいる事柄である。

この二つは人間の理性と良心を刈り取り、どんな恐ろしい行動をも強いることができた。

しかもそれだけで行動の「根拠」となり得る。

神がこう言っているから、あの人がこうなることを望んでいるから。中には例外もあるうが、救いような無い程残酷な出来事にはこの2つが絡んでいる。

理性を重んずる彼は、それ故に無宗教で恋愛感情を意図的に封じていた。

それが人間として不自然な生き方であることも、彼は分かっていた。

鬼怒川は横目で旅の仲間を見る。

楽しそうに話す2人。

今、この2人がどういった関係なのか、鬼怒川は正確に把握していない。しかし友情とは別の感情が芽生えているのだとしたら、困る。今は良くても必ずや魔具を集め元の世界へと帰るのだから、別れが訪れるのは必定。その時どのような不都合が生じるのか・・・

鬼怒川は決して楽観的な見方をしなかった。それが彼の長所であり、

最大の欠点だった。

「先輩、思ってたよりも報酬もらえましたね。」

「ん、ああ。それはまあ五つの座を倒したわけだからな、あれ位貰えなければ逆におかしいだろう。」

数日間かけて首都へと到着した彼らは王城への報告を済ませ、王城からエイムまでの道を歩いていた。

時折下級のモンスターに出くわしたが、3人の前には1分と立っていることは出来なかった。

緩やかに流れる時間。

没しかけている太陽を眺めながら、ベルフェゴールは幸せを感じていた。

かつてイワキリと森からエイムまでの道のりを歩いた時の空とよく似ているが、今は彼とも仲直りして、しかも単なる旅の仲間以上の関係になっている。

彼女もいつか、別れが訪れるのは分かっていた。この旅が終われば再び会うことは決してないことも分かっていた。故に彼女は自分の思いをイワキリに伝えるつもりは無かった。そしてこの一瞬の時間を大切にしかかった。

いつ死ぬとも分からない旅の中で、タグリヌスの魔物を倒し、暗殺団の追跡が途切れた僅かな空白の時間の中、彼女はおぼろげに描いていた思いを実行に移した。

イワキリは彼女がキスしたことを夢だと思い込んでいる。だからそれは彼女だけの思い出。

少女の恋愛感情にしては、あまりに切な過ぎる考え方だった。しかしその平穩は、ベルフェゴールが考えていた以上に早く崩れ去ることとなる。

「あれ、エイムの尖塔に何かいますね。」

イワキリの視力が塔の上にうづくまる「何か」を捕らえた。羽毛の塊。それが彼の第一印象だった。

「む、何かいるのか？」



「何でしょうねあれ・・・巨大なカラスが首をうずめて寝ているような感じですけど・・・」

彼が眺める中、謎の物体は視線を感じ取ったようにむくり、と動き出し、その巨大な羽を広げた。  
息を呑むイワキリ。

3人のハンターに向かって優雅に微笑するそれは、セラティエル国で伝説として語り継がれている存在だった。

「エウリノーム!？」

イワキリが叫ぶのと同時に、背から黒い翼を生やした魔物が指を鳴らす。

「こつちを見る」と言わんばかりに。

瞬間、長い歴史を持つ荘厳な街並みが紅蓮の炎に包まれた。

「火事・・・」

「本当ですかイワキリさん!？」

目を凝らすベルフェゴールと鬼怒川。彼らの目にも夕刻にしては不自然な程明るい街が映る。

「ど・・・どうしましょう。この距離じゃ・・・」

口に手を当て慌てるベルフェゴール。

何年も森の獣と渡り合ってきた彼女も、この出来事にはすっかり狼狽してしまっていた。

「・・・そうだな、とりあえず私とイワキリで街に向かおう。ベルフェゴールさんは王城に戻って応援を呼んでくれ。」

冷静に判断を下す鬼怒川だが、その顔は街の炎と反比例するように険しく暗い。

「二人乗りだイワキリ君。飛ばすぞ。」

「・・・」

「おい!」

「あ、はい。」

イワキリは突然の出来事に僅かの間、放心していた。

一般市民を巻き込んで火をつける。それも理由の無い、強いて言え

ば自分の殺人衝動を満たすために。

それは人の表情をつぶさに観察し、時には一步も二歩も引いて場を乱さないようにするイワキリにとって、まさに自分の道徳感情の対極にある行動だった。

それまで魔物に対して「自分が倒さなければならぬ対象」と認識はしていても、別に特別な感情は持っていなかった。

しかしエウリノームの行動が、直感を行動の最終的根拠とするイワキリの逆鱗に触れた。

絶対に許さない。

王城へと走っていくベルフェゴールを見つつ、イワキリは疾走する杖の上で自分の刀を出した。

いつ、どの角度から見ても凶悪なフォルムであるそれも、彼の精神に呼応してか闘志を纏っているようであった。

イワキリは思った。

今更英雄らしいこと言い出すのもあれだけど、あいつは殺さなければ。

彼の足が震える。それは単なる杖の振動だけではなかった。

・・・何を臆しているんだ俺は。昔からやればできる奴だったよな？

その問いに肯定するように、大剣は夕日を受けてきらりと光った。

## 第二十五話

王城までは10分弱。

日常的に狩を行っていたが故に、同年代の少女より体力のあるベルフェゴールは、しかし息が上がり始めていた。

不安。それが彼女の中で渦巻いていたことが原因の一つにある。

彼女の不安。

もし自分が間に合わなければ尊い人命が無数に失われるということ。仮に失敗をしても最悪自分が死ぬだけで済む森での生活と決定的に異なる。

その事実が彼女の心を縛っていた。

「・・・あ！」

彼女は足を止めた。

目の前に犬型のモンスターが立ちはだかった。

歯を剥き出しにして涎を流すその姿は狂犬を思わせる。

鬼怒川やイワキリなら秒殺の相手でも、ボウガンを持っていないベルフェゴールには強敵だった。

「・・・来ないで！」

ベルフェゴールは腰の短剣を抜いた。

鬼怒川が一応、ということで彼女に預けたタグリヌスの魔具である。切っ先が自分に向いているのを見るや否や魔物は目を細めた。

慎重にこちらの出方を伺っている。

彼女は短剣を握りなおした。

自分にはきつとこの魔物を倒すだけの力も素早さもない。

しかし飛刀術ならば、あるいは倒せるかもしれない。

ベルフェゴールは深呼吸した。

重さを確かめるように強く握る。

そして一気に間合いを詰めると、4mきつかりのところで短剣を振り上げる。

途端に魔物が口を開けた。

「ガ  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
！」

振り下ろす瞬間に咆哮が放たれた。

それに動揺した彼女は、持つ手を僅かに滑らせてしまった。

短剣は魔物の頬の横を通り過ぎる。

魔物は歡喜の表情を、ベルフェゴールは絶望の表情を浮かべる。

今、短剣を外してしまった。

残る武器はレオナルドから奪った毒薬の詰まったビンのみ。しかしそれをどうやって体内に取り込ませればいい？

ビンを魔物の口に突っ込むしかない。

彼女は覚悟を決める。

しかし、決着は拍子抜けするほどあっけなかった。

脇を抜けて地面に突き立つはずの短剣が180度方向転換して魔物のこめかみに刺さったのだ。

「え？」

今度はばかりは魔物もベルフェゴールと同じ表情を浮かべる。

そして魔物は傷口から全身が崩れ絶命した。

「これが魔具の力……？」

彼女はベラドンナのセリフを思い出す。

盗賊団は別に希少価値から魔具を狙っているわけではない。

「これは……とても盗賊団なんかには渡せないわね。」

拾う短剣も先程より重く感じられる。

鞘に収めると、ベルフェゴールは再び城への道を急いだ。

## 第二十五話（後書き）

大変長らくお待たせしました。

諸般の事情により更新が滞っていましたことをお詫び申し上げます。

## 第二十六話

渦巻く火炎が逃げ遅れた人々を包む。

そしてその中で牛の頭を持つ怪物が住民を手当たり次第に殺していた。

それを眺めるエウリノームは、しかし楽しんでいると言うよりも何かに待ち焦がれているようだった。

「早く来い……私はこんな自分が何もしない復讐には飽きてしまったんだよ……」

普通の人体では、彼の膂力は満足できなくなっていた。

これは大掛かりなフェイク。

これを知った英雄は駆けつけなくてはならない。

自分の妹を倒した連中ということは、少なくとも瞬時に勝負が決まってしまうような雑魚ではない。

やはり、私の目に狂いは無かった。

「抗って私を満足させる。そして死ぬ。」

大火事の中、彼の高笑いが響く。

「あーあ。本当にお前の能力は便利だよなあ。」

「うるせえ黙れ！」

「静かにしなくちゃならねえのはお前の方だろペヨーテよあ。」

悔しそうな舌打ちが響く。

エイムのある狭い路地に二人の男が身を潜めていた。

「ダイスの目」構成員のペヨーテとコブラである。

三人組が生きていると知ったペヨーテが近くにいた彼と合流、追跡を続けようとしたところで魔物の襲撃にあったのである。

「……なあ、真面目な話本当にお前のペットちゃん達は呼べない

のか？」

「コウモリにとって魔物は天敵だからな。俺とあいつらは主従って言うより協力関係だからさ。不利益を強いることはできない。」

やれやれ、とばかりに大げさな身振りで肩をすくめるコブラ。

ペヨーテはイライラしつつも突っかかることが出来ない。

「ま、エウリノームと英雄の始末は俺がやつとくから、お前はどっちかがエイムから逃げないように入り口で見張ってるよ。」

分かった。としぶしぶ頷き、魔物に見つからないようこっそりと街の入り口へ向かうペヨーテ。

その姿を「ざまー見ろ」とニヤニヤ笑って見送っていたコブラだが、煙に姿が隠れると表情を引き締め、自分の愛刀を抜いた。

炎に照らされ純白の輝きに磨きがかかっている。

こいつを血で染めれば、どんな宝玉でも叶わない美しさが宿る。

奇しくもエウリノームと同じ危うい笑顔を浮かべながら、コブラは手始めにこちらに接近してくる魔物をただ一太刀で両断した。

「さーて、エウリノームとやらはどこにいるんだ。」

コブラは考える。

エイムの放火の目的はおそらく人間への「復讐」

それならどこかでこの様子を眺めているのではないか？

上空を見回すと案の定、尖塔の頂点に黒い影が見えた。

コブラは最短距離を突っ切るために丁度横切っている魔物の群れへと突っ込んだ。

彼にとつて手先の魔物は障害物以下の存在でしかなかった。

スナイパーであるローズは漁夫の利を狙った戦法を取ったが、接近戦主体のコブラはそれと正反対であった。

ターゲットはお互い、死闘の「準備」を整えている状態。

ならばそれが始まる前に両方叩けばいい。

それより何より、彼は待つということが苦手であった。

「斬って斬って、斬りまくるぜ・・・」

彼の耳には魔物の怒号が観客の声援のように聞こえている。

魔物の死体は瞬時に灰になり、コブラへと降りかかる。

第三者から見れば死闘なそれも、当の本人には肩慣らし同然であった。

「結局よ、人間っていうのは積極的に行動を起こそうとしなければ何にもできねーんだよ。待ちなんて糞食らえだぜ。なあ魔物さん共よおおおお」

ローズがその「待ち」が出来なかったために敗北したことなど、彼は知る由も無かった。



## 第二十六話（後書き）

すいません今回も更新遅&文量少で・・・  
4月入ったらなんとかしますんで、どうか暖かい目で見守ってやってください。

## 第二十七話

「・・・こいつはひどいな。」

「そうですね・・・」

イワキリと鬼怒川は街の中ほどで杖から降り駆け出した。

戦闘のためにも、魔力を温存しておかなければならないためである。

「雑魚を始末する時間も惜しい。ここは二手に分かれて搜索しよう。」

「もし尖塔にいたら俺登れませんか？」

「エウリノームの性格からして私達を見つけて逃げようとするとは考えにくい。そもそもこの殺戮自体私達を誘ってるものだろう。戦闘が始まったら片方が駆けつけるようにしよう。」

つまりこの殺戮も、エウリノームにとっては必要な犠牲？

イワキリは怒りで自分の言葉をよく吟味しないまま発してしまう。

「・・・先輩は、人を殺したことがありますか？」

業炎の中にも関わらず、全ての音が止んだような気がした。

「・・・無い。」

いつもと変わらない、鬼怒川龍一の声。

その事実にあ堵と疑問の感情がイワキリの中で膨れ上がる。

「・・・でも先輩、虐殺堕天使って・・・」

「腕の骨を叩き折ってもう盗賊として生活できないようにしただけさ。再起不能にした数は、確かに盗賊団にたてついた人間の中で一番多いだろうな。」

そうでしたか、とほつと胸をなでおろすイワキリ。

鬼怒川がどんな顔をしてそのことを言ったのか、後ろを走っていたために気づくことは無かった。

「さて、そろそろ二手に分かれ・・・」

そこで切れるセリフ。

追いついたイワキリもげんなりな顔になる。

そう広くない道、2人の前に男が立ちふさがっていた。

口元以外全身包帯で巻かれ、左手には抜き身の刀を下げていた。

この状況で目の前の人物がただの怪我人であることを期待するほど、2人も甘くない。

数秒後、鬼怒川が口を開いた。

「・・・火事場泥棒ならよした方がいい。今の俺は・・・とても機嫌が悪いからな。」

鬼怒川の一人称が「俺」となるのは黄色信号。

彼が纏う雰囲気も普段の温和なものから徐々に変わり始めている。

「魔物ってよく、斬っても血が流れねーんだな。俺はさっき初めて知ったぜ。」

鬼怒川の殺気を軽く受け流す包帯男 コブラ。

「と、いうわけで、だ。ちよつとつまなくなつたから人が斬りたくなつて来た訳よ。俺はあんたらの始末の任務も請け負っているから丁度都合がいいわけだ。」

「・・・先輩。」

「ああ、任せた。」

2人で当たればおそらく倒せるだろうが時間がかかる。

ここは二手に分かれるべき。

両者とも同じ結論に達した。

鬼怒川は道を引き返し、イワキリは刀を出した。

「ほおお、あんたが来るか。楽しませてくれよ」

コブラとイワキリは刀を構える。

そして 走り出す。

イワキリが刀を投げる。

コブラは低い姿勢から更に身をかがめ刀の襲来をかわした。肉食獣のような態勢からコブラは刀を上段に振りかぶる。

今のイワキリは武器を手放し、無防備に見える。勝った。

双方の思考が一致する。

イワキリは刀を呼び戻し、射程に入ったコブラに下から切り払った。しかしコブラは動じない。

自分の腹にイワキリの刀が入る寸前、跳躍。

刀を踏み台に、空中で身を捻る。

そしてイワキリの背後を取った。

「しねええええ！」

純白の刀を突き出そうとして・・・動きが止まった。

イワキリの後姿には微塵も動揺が現れていなかった。

なるべくしてなった状況。

明らかに勝利を確信している気配。

「っぐ！」

「理」よりも自分の直感を信じ、バク宙で2mほど離れる。

直後、イワキリの大剣がコブラがいた地面にざっくり刺さっていた。

イワキリは下から切り払うように見せ、その勢いで空中に放ったのである。

動作をやめなければ、やられていたのは明らかにコブラであった。

未恐ろしい奴。

コブラは齒を食いしぼり、今は向き直って正対しているイワキリを睨んだ。

20kgはかたいあの糞重そうな大剣を、まるで手足みたいに使いこなしてやがる。

これはもう、遊んでる暇は無い。

自分の愛刀に視線を落とす。

最悪、この魔具の能力を使うことになるかもしれない。

誰もが聞けば嫌悪する狂気的能力を、この刀は有している。

だがもう手段とか言ってられる状態じゃない。

ペヨーテのことが頭に浮かんだ。

・・・信念があったらこの状況を変えられるかってんだ、あのかっ

こつけめ。

コブラはまるで飛び出そうとしている魚を抑えるがごとく、刀を強く握り締めた。

## 第二十八話

とん。

軽い音と共に鬼怒川は教会の屋根に降り立った。

目の前にはこの事件の首謀者であるエウリノームが背を向け立っている。

「君一人では倒せないよ、鬼怒川君。」

火がはぜる音にかき消されないようにとやや大きめの声で呼びかける。

対する鬼怒川は無言で杖を蹴り上げ、手に収める。

武器を構えたのを見てエウリノームは苦笑し、鬼怒川が予想だにしないことを話し出した。

「君と私とは良く似ているよ、自分の目的のために手段を選ばないところとか。君が盗賊団の奴らを殺さなかったのは良心が咎めたためではない。別の目的があったからさ。違うかい？」

「・・・だったらなんだというんだ？」

「いやさ、そんな強い君と対峙できるかと思うと嬉しくてさ、ちょっと言ってみただけだよ。」

鬼怒川は冷静に観察する。

目の前のにやけている魔物はまったく構えていない。自然体である。それがかえって不気味であった。

鬼怒川は杖を宙に放り投げるとそれに飛び乗り、同時に呪文を詠唱し始めた。

「悪しき魔物を灰燼へと歸さしめん！」

魔導師の呪文は魔導師ごとに異なる。

鬼怒川の詠唱も自作であった。

短く、強く。その考えのもとに唱えられた呪文がエウリノームを襲う。

街を覆っていた炎の一部が立ち上がると、エウリノームに向かっ

てしなだれかかるように倒れてきた。

鬼怒川は巻き込まれないよう一瞬早く離脱する。

飛行の魔法を展開しつつ火炎の呪文を使うという離れ業をやった鬼怒川は、しかし油断していなかった。

この程度で相手が死ぬわけが無い。

そしてその予想は当たった。

全てを焼き尽くす炎の牙は黒い疾風にかき消された。

「いやあ私も久々に本気をだすことになるね。」

エウリノームの手には禍々しい大鎌が握られていた。

「さああがけ。弱者の中の強者。」

鬼怒川は大きく深呼吸をして目の前の敵をぶちのめす方法を思考し続ける。

それがまると、エウリノームを貫かんばかりの勢いで杖を走らせた。

一筋の閃光が殺到するのを、魔物は静かに眺めている。  
そして大鎌を大きく横に振った。

二つの影が交差し・・・

「ほう・・・死ななかったか」

どさり、と倒れこんだのは鬼怒川であった。  
左肩の刺し傷から血が流れる。

「今ので死ぬと思ったんだが・・・」

勝ち誇るでもなく、不思議そうに呟くエウリノーム。

鬼怒川はその瞳に深い敗北感を宿しながら、今起きた出来事を考えてみた。

本来、あの鎌の一撃は師匠からもらった義手で防がれるはずであつた。

負け惜しみではないが、自分の判断を誰も責めることはできないだろう。

そう、客観的に考えれば「斬りたいものだけを斬り、他のあらゆる物質は透過することができる」なんて魔具の能力をこの場で推測するという方が無理な話である。

大鎌は自分の左腕をすり抜け、首へと噛み付いてきたのだ。

とっさに身を捻り首筋へのコースは外したものの、エウリノームの胸に杖を打ち込むというこちらの攻撃も断念せざる負えなかった。

鬼怒川は考える。

あの時、自分がコースを変えずに突っ込んだら確実にエウリノームは倒せていただろう。

無論、自分の命と引き換えにはあるが・・・

鬼怒川はこの時、生まれて初めて自分の行動に深く後悔したのであった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1320d/>

---

英雄になろう

2010年10月18日14時35分発行